



マーシャル方面遺族会
 (旧クェゼリン方面戦没者慰霊会)
 〒103 東京都中央区
 日本橋人形町1-8-2
 電話 03-3661-8760
 FAX 03-3661-6241
 振替口座東京0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗二

五十年祭 総会 直会

内海 淑子

平成六年三月二十七日(日)社頭の桜はこのところの寒さで全然開いておりませんでした。少し風が強くと肌寒くはありましたが、一点の雲も無い好天に恵まれ五十年祭に相応しい日でした。

血肉を分けた肉親が護国の英霊となつて五十年、例年よりも一段と重みのある慰霊祭ですから各地から例年よりはるかに多い三百名を超える方々が参列されて盛大、厳粛に開催されました。八時三十分から受付が開始されますと、この日を楽しみにして居られた方々の一年振りの再会を喜びあう姿がそこに見受けられました。

九時、参集所で日本通運の係員から八月の現地慰霊巡拝の説明などがあり九時二十分、昼間常任幹事の司会で会長から「御祭神の御霊は今日を指折り数えてお待ちしておりますことと思います。昇殿参拝の時間は約一時間です

がごゆるりと御霊と対面され対話なされて下さい。それから皆様ののご了解を戴けたらこの席で総会を行うこととさせて頂きたい」とご挨拶がありました。

次に黒川幹事より平成五年度会計決算報告(別掲)平成六年度の予算案(別掲)が報告され、高橋監事から監査の報告がなされました。次に会長から今年の大きな仕事は環礁五十年祭記念号の発行、八月の現地慰霊と五十年祭記念誌の発行でありますと補足説明があり、満場一致拍手で承認され議事を終了しました。

十時、参加者全員拝殿に昇り大野俊康宮司様の御丁寧な御挨拶、国歌演奏、修祓の儀、献饌の儀、祭主祝詞奏上、と続き佐藤会長が祭文を奏上なさいました。心に沁みる祭文で、御霊もきつとお喜びの事と思えました。

(3頁へつづく)



目次

五十年祭 総会：内海 淑子	1
大野靖國神社宮司御挨拶要旨	2
五十年を顧みて(一)	6
東島志津代 松永タツ子	
大井 和子 奥田 和広	
渡辺 三三 伊藤つや子	
奥山 キノ 村梶 光栄	
五十年祭写真の注文について	12
靖國神社に御奉賛を	12
厚生省主催現地慰霊巡拝	13
萩原 誠 相川 孝夫	
戦地からの便り	15
塚田 民子 斎田ヨシエ	
五十年を顧みて(二)	16
江村 源次 山内 キク	
徳原 勇 新保 晃	
石川 正興 田賀 朋子	
大石 明 江間正二郎	
薬師寺理助	
宇治丸を御存知の方へ	21
朝香宇彦様の御昇天を お悼み申しあげます	21
ウオツゼ、マロエラップ座談会	22
名簿訂正(6)	22
寄付者芳名	23
本部だより	24



大野靖國神社宮司御挨拶要旨

本日マーシャル方面遺族会の皆様方多数御参拝戴きましたことは、誠にありがたく厚く御礼申しあげます。私は、平成四年四月一日松平前宮司の後を受けさせていただき、第七代の宮司の重責を拝命しました大野俊康であります。それまでは熊本県天草島の誠にささやかな地方の一宮司でございました。図らずも靖國神社の宮司といふ重責を拝しまして、微力でございますが前宮司の跡を受けまして、その志を受け継ぎながら微力を尽くしてゐるものでございます。

かねてマーシャル方面遺族会におかれましては、靖國神社に対する御奉賛誠に尊く大きく、感謝と敬意を表してをりました次第でございます。先般佐藤会長様より会報の「環礁」六十号、そして「会員名簿」六十三年度・平成三年度の二冊を頂戴いたしました。そ

れを拝読し改めてこの会がいかに御熱意をもって英霊顕彰のために御活躍されてゐることを知り心から感激してをる次第でございます。

恒例の慰霊祭を本年は五十年祭といふことで、格別に慰霊して戴く訳でございますが、皆様方におかれましても五十年といふ永い歲月の本日、御社頭に額づかれまして感慨も一入のものがおありと存ずる次第です。来年がいよいよ終戦五十年となります。

しかし、誠に残念なことでございませうが、戦後の誤った東京裁判史観に毒された酷い細川発言にありまして、御祭神に対して誠に申し訳ない極みでございます。環礁六十号にもそのことを強く訴へてをられました。誠に同感でございます。

文部大臣が「靖國神社には自分は参つたこともないが、これからも参つつもりはない。」と誠にとんでもない発言。そしてまた、総理(細川)自身「先の大戦は侵略戦争であつた」と、言語道

断の発言であります。私共靖國神社といたしましても全国の護國神社とあいともに、その発言撤回を求めて、ただ今署名運動をとり行つてをります。

昨年の十二月八日、私は集まりました署名を持ちまして、首相官邸を訪ねました。生憎本会議で首相には会ふことはできませんでしたが、その署名簿と靖國神社の遺稿集を届けまして、是非首相はその英霊の声を聞いて戴き、いち早くあの「失言」を撤回されるやうにお願ひ申し上げ、特に十二月八日その日を選んでまゐりましたのは、開戦の大詔を細川総理が踏みこむものであり、その御反省を強く求めたからであります。その後三月九日には重ねて、全国護國神社宮司会会長が、そのとき集まりました署名、両方合わせ六万余を提出いたしました。総理の今後、発言撤回になるまでは、靖國神社、護國神社としまして反対署名運動を続けてまゐる所存でございます。

五十年と申しますと、昨年は学徒出陣五十年でございました。私自身もその一人でございましたが、遊就館に於きましては「学徒出陣五十年展」を行つてをります。意外に若い人々がこれを拝見し、非常に感銘したと、殊に大学生が自分と同じ年齢の先輩がどのやうな気持ちで散つていかれたか、深く反省しなければならぬと、かういふ感想文を多く残してくれてゐます。まさに「英霊未だ滅びず」でありまして、

誤つた教育を受けてをります若人でもあの学徒出陣展を拝見してそのやうな感想を書きしるしてくれてをります。

我々生き残つた者が、正しい靖國信仰を子孫孫まで伝へなければならぬ、これが生き残つた者の我々の努めであらうかと存じます。どうぞ皆様方にも益々お身体を大事に長生きして頂きますと共に、お子様にお孫様に正しい靖國の心を伝えて頂き、靖國神社が末永く御國の鎮めとして弥栄下さいますやう、今後とも格別の御協力をお願い申しあげます。

ただ今から昇殿参拝をして戴きますが、あの正面の大鏡、明治天皇様の明治十年御親拝の折の御幣帛料をもつてお作りした大鏡でございます。日露戦争後の明治三十九年、明治天皇様が「靖國のやしるにいつくかがみこそやまと心のひかりなりけれ」と御詠みでございます。どうぞ、御本殿に御昇殿あそばされたら、その大鏡を通して靖國の神々の大和心のひかり、これをさるに深く肚に納め戴きまして、今後とも靖國神社の弥栄えのために格別の御支援助奉仕のほどをお願ひ申し上げます。

本日の御参拝誠に忝なくさだめし御祭神もお喜びのことと存ずる次第でございます。今後ともお大事に益々の御繁栄を念じまして御挨拶いたします。本日の御参拝誠にありがたうございました。

(1頁より)



拝殿いっぱいの参列者

の植川二男様、広島奥井礼子様、香川の石川正興様、長崎の林文枝様の五名が玉串奉奠、代表と共に礼拝、しばし黙禱して亡き御霊を偲びました。御本殿退下後、遊就館の前で記念写真の撮影があり、この写真を五十年祭記念誌に載せる予定との事です。

五十年祭直会

今年の直会は九段会館で催すために参加者は誘導係について九段会館階「桜、菊の間」に移りました。

黒川幹事が直会の司会をされ、佐藤会長の挨拶、川副克己様の発声で乾杯し、会食、懇談になりました。

ほどなく錦正流一門の方々の大正琴の演奏で奉納芸能が始まりました。

演奏者は名倉錦香さん、八木錦桜さん、古明地(こめじ)錦洋さん、の三人で同期の桜、風雪ながれ旅、祝い船、北国の春、ラバウル小唄を次々と年代を思い出させる哀愁のある素晴らしい演奏でした。次は迫力十分な安藤民謡会の東北民謡となりました。

一 三味線合奏 おこさ節



今年は大勢なので二回に分けて御本殿に上がる事になり、一回目は会を代表して佐藤会長、顧問の栗林徳五郎様、相談役の大給湛子様、新潟の高林セキ様、秋田の奥山キノ様、宮崎の山内キク様の六名が玉串奉奠、一同代表にあわせて礼拝し、黙禱し思い思いに五十年前の御霊を偲びました。

二回目は福岡の橋本マサエ様、熊本

祭文

本日 茲にマニラル方面遺族會五十年祭を齎すたる中、マニラル群島ギルト諸島及びその周辺海域で散華せられた三萬餘柱の神靈に申上げます

皆様方は、祖國防衛の崇高な任務を授けられ、味方の軍艦一隻も飛び機一機の支援もない南溟の孤島において、我に幾千倍の戦力を有する強敵を討つて玉砕され、或は一切の捕獲の途絶した絶海の孤島を本土の戦備の整う日まで死守せよと悪戦苦闘の末、尊い御命を以て捧げられました。祖國の命運を賭けた聖戦も時に利かず、敗戦の憂目を見ました。これは一徳國民痛恨の極みとこそなす。荒廢した國土に立たされた私共遺族は一般國民以上の苦難の途を餘儀なくされましたが、皆様方の御遺志が家族の幸と國家の安寧にあられたことに思ひを致し、堪へ難きを堪へ、忍び難きを忍び、ついで幾多の困難を乗り越えて今日に到ります。

神靈の御守護は尊く、今やわが國は世界の歴史に未だ嘗て例を見ない平和と自由と繁榮の豊土に湧いて存ります。

國際社會におきましても、樞要な地位を占めるに到りましたが、是は偏に祖國と同抱の平安を念じながら散華された皆様方の尊い御献身の賜であります。

先陰矢の如くと申しますが、あの日、既に五十年の歳月が流れました。

悲痛な歴史も次第に風化し、やうとす風潮も見受けられる時勢とばかりでしたが、私共は朽にふれなかりし日の皆様方の御霊を偲び、新たな想いを馳せて存ります。

私共は皆様方の清き明き直き中心を承継して、祖國並びに世界の平和と繁榮に盡すため、今後とも不撓の努力を致すことをお誓ひ申上げます。

何卒私共の行く先を御照覽賜はり併せて神靈の御遠に安らげ、神鎮りまされんことを心よりお祈り申上げ祭文と致します。

平成六年三月二十七日

マニラル方面遺族會

會長 佐藤宗丕



錦正流一門の大正琴演奏

三味線合奏 津軽甚句
 二 秋田大黒舞 小林君子
 三 秋田馬子唄 相原邦子
 四 生保内節 渡辺正子
 五 長者の山 横島弘子
 六 本莊追分 河井佐恵子
 七 萩刈り唄 中島利男
 八 三味線合奏 津軽じよんがら節
 九 じよんがら節 由利利子
 十 新相馬節 佐藤桂子
 十一 大漁唄い込み 安藤豊月
 尺八三名と総勢十四人の熱演に会場は湧きました。
 楽しい民謡が終わってしばし懇談、芸達者な有志のカラオケのあと、佐藤会長のリードで武田節の替え歌靖國の杜 月さやか 宴をつくせ 明日よりは慰霊の誠 捧げつつ

第30期決算報告書 (自平成 5 年 1 月 1 日 至平成 5 年12月31日)

マーシャル方面遺族会

1 一般会計収支計算書

<収入の部>

科 目	金 額
前期より繰越	6,532,281
会 費	1,114,000
寄 付 金 等	1,415,734
受 取 利 息	473,927
雑 収 入	116,420
(小 計)	(3,120,081)
合 計	9,652,362

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	532,584
運 営 費	478,720
事 務 所 費	600,000
広 報 費	628,032
印 刷 費	5,150
刊 行 費	115,810
通 信 費	142,376
消 耗 品 費	14,121
会 議 費	225,397
送 金 諸 費	31,415
公 租 公 課	94,480
雑 費	1,442
(小 計)	(2,869,527)
次 期 へ 繰 越	6,782,835
合 計	9,652,362

2 一般会計財産目録 (平成 5 年12月31日現在)

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
現 金	73,561		
普通預金	59,106		
郵便振替	280,110		
金銭信託	1,870,058		
定期預金	4,500,000		
		次期へ繰越	6,782,835
合 計	6,782,835	合 計	6,782,835

3 特別会計 (現地慰霊碑維持基金勘定)

収 入 の 部		支 出 の 部	
前期より繰越	7,500,000		
		次期へ繰越	7,500,000
合 計	7,500,000	合 計	7,500,000

(注) 定額貯金及び貸付信託として保管。

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

平成 6 年 2 月 6 日

監 事 高 橋 鎮 夫 印

同 栗 原 利 雄 印

マーシャル方面遺族会

会 長 佐 藤 宗 丕 印

第31期一般会計予算

(自平成 6 年 1 月 1 日 至平成 6 年12月31日)

<収入の部>

科 目	金 額
前期より繰越	6,782,835
会 費	1,200,000
寄 付 金 等	1,400,000
受 取 利 息	250,000
雑 収 入	50,000
(小 計)	(2,900,000)
合 計	9,682,835

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	800,000
運 営 費	500,000
事 務 所 費	600,000
広 報 費	870,000
印 刷 費	10,000
刊 行 費	4,000,000
通 信 費	200,000
消 耗 品 費	20,000
会 議 費	220,000
送 金 諸 費	32,000
公 租 公 課	50,000
雑 費	10,000
(小 計)	(7,312,000)
次 期 へ 繰 越	2,370,835
合 計	9,682,835



安藤民謡会の東北民謡

雲と興れやマーシャル遺族会と全員声高らかに歌いあげました。最後に昼間常任幹事の音頭で全員で手締めをしてお開きとなり意義深い今日の行事は滞りなく盛大、厳粛に行われました。

五十年祭参列者芳名

(敬称略、順不同)

Table listing names of participants for the 50th anniversary ceremony, organized by region (e.g., 大路, 東京, 会田, etc.) and arranged in columns.

静岡 県	江藤ふみ子	江藤富士雄
江藤シズエ	武藤 いそ	峰 まき子
野崎 豊秋	服部くにゑ	三浦 久夫
三浦 たき		
愛知 県	伊藤つや子	伊藤 炭
大見シノブ	浜田 芳枝	
京都 府	川本 彦次	川本 玲子
川本 温子	大江多賀子	丸田 忠雄
丸田 茂男	丸田 巖	端 千鶴子
大阪 府	林田 峯子	内山まさ江
兵庫 県	大石 明裕	
奈良 県	山中 美子	栗山 美子
鳥取 県	井上 照美	
岡山 県	高田源次郎	植田 秋子
広島 県	植田 敏裕	植田 秋子
奥井 礼子	瀬戸 隆子	安田 房子
香川 県	秋山百合子	石川 正興
石川 妙子	奥田 和広	奥田 幸子
奥田 正幸	奥田 良子	眞鍋 信一
眞鍋 公子	宮武 敏子	三宅 陽子
愛媛 県	河野喜代茂	兵頭 義彦
松友 公子		
高知 県	馬場 常	馬場 剛人
福岡 県	金子庄之助	金子サヨ子
橋本マサエ	平田 郁子	
長崎 県	安達美加栄	安達 孝司
井上 義夫	大石 明	川副 克己
林 文枝	松尾 正輝	山下 タエ
熊本 県	植川 二男	植川 幸子
片山 康子		
大分 県	栂田志津子	
宮崎 県	山内 キク	
鹿児島 県	村上 義博	村上 芳江

五十年を顧みて(一)

マキンの空に散華した

あなた

大分県 東島 志津代

旧姓(栂田)

昭和十八年十一月十九日早朝より、ギルバードにいた日本軍に対し、米軍の空襲は激化し、機動部隊の活動も積極的で、マキン、タラワに二十一日、上陸を開始した。タラワ、マキンの日本軍は、勇戦奮闘したが衆寡敵せず、十一月二十五日全員玉碎した。

この為十八年九月十八日から十一月二十四日まで、寒冷の北千島で索敵防備にあたっていた、五三一空飛行隊は、十一月二十六日、急ぎよ、マーシャル方面(ウオツジエ)へ転出し、日夜、マーシャル、ギルバート方面の防備についた。マキン陥落一ヶ月目の十八年十二月二十五日、〇一一五、天山艦攻三機は、ウオツジエ発進、ミレ島で爆装(六番六)ミレ島発進〇二三〇、マキン上空着〇三〇〇、マキン島東端附近米軍滑走路を爆撃する。爆弾は滑走路附近に弾着し、相当の戦果が認められたので、効果を確認中、米軍グラマン戦闘機四機が上昇してきて、戦闘機対、天山艦攻機の空中戦となった。主人の機は、指揮官機として狙われ

たか、僚機をかばってか集中攻撃を受け被弾、エンジンから火を吹き、基地帰着が困難となったので、米軍滑走路めがけて突入、自爆戦死した。夜明け前午前三時頃でした。搭乗員は、操縦東島富士夫飛曹長、偵察栂光太郎中尉、電信宮川洵治一飛曹です。主人の東島飛曹長(二十四才)は日中戦争で航空母艦飛龍より渡洋爆撃に度々参加し、金鶏勲章や賜金を下賜され、飛行時間一万時間近いベテラン操縦者でした。

私は二十才になったばかり、結婚わずか一年七ヶ月の短い夫婦でありました。出征前夜、私の髪を撫でながら「学校を卒業したままのお前が本当にいい女房になったなあ。俺は本当に嬉しいよ。俺が戦地に出たら佐賀に帰って農業を手伝ってくれ。小中学の正教員免許状のあるお前だが、俺の凱旋まで頼む。ばあちゃんも年だから、よろしく頼む。」と呉々も頼まれました。

館山から真直ぐ佐賀へ帰り、生まれてはじめて握った鍬や鎌、牛を飼い、むしろや縄を作り、谷間の泉を桶で担い揚げ、飲み水とする。傾斜五十度の山の斜面の木の枝を長い鎌で落し薪として担う。お嬢さん育ちの私には、慣れぬ山家の暮しで、手足は、ひびや、あかぎれで痛く血がにじみ、泣きながら必死で取りくみました。励ましてくれる人も、頼りにする人もなく、朝は四時起き、炊事洗濯、牛飼、農事、

薪落し、縄ない、むしろ作りや痴呆症の祖母の看病で毎日、くたくたになりました。辛く泣きたくなくても、助けしてくれる人もありません。戦死した夫の名を心の中で呼びながら、「あなた!!助けて」と泣きじゃくりながら仕事にとりくみました。

昭和十九年になり、実家の兄(中学校教師、二十二才)がブーゲンビル島で戦死する。弟(大分大学教育学部四年生)が学徒動員で佐世保工廠で働いていて空襲にあい、発病、母がガンにおかされ介抱する者もなく、一家全滅の状態になりました。私は義父母の許可を得て実家に帰り、母と弟の看病をしました。母と弟の病状も快復に向いましたので、厳しいテストを受け、呉鎮守府軍属として十九年五月から二十一年三月まで、宇佐海軍航空隊副官部理事生として勤務しました。

仕事は、軍機密に関する兵員移動と功績の上申と、戦時負傷者の看護です。二十年になると、九州の航空隊は沖繩戦の基地であったので、戦闘機、陸攻艦爆、艦攻、桜花などの各隊が集合し、それに伴って搭乗員整備員と隊員は増加、B 29、グラマン戦闘機の空襲は連日で三十機、四十機と空が真黒になる程、来襲してきます。

最初は、三月十八日正午過ぎ、隊内では分隊対抗の水泳競技が行われ、後は歌謡ショーが開かれていました。キーと鋭い金属音と共にバリバリという

銃声! 「退避」 「グラマンだ。」と大声で呼ぶ声に、どこへ逃げてよいかわからぬまま、机の下にもぐりました。銃声が聞こえなくなつたので、庁舎の外に出ますと人や馬がバタバタ倒れています。腹を押え、細長い紐のようなものが垂れ下がっている。顔や腹、脚に大穴があいて、向側がすけて見える。一瞬、ドキッとして、息がつまりそうになりましたが、パッと医務室に走って行きました。庁舎の前に負傷者が青ざめた顔色で寝かされています。手を消毒して、軍医さん、医務科の兵隊さんの指導に従い治療の手伝いをしました。初経験だったので、人間の腹が簡単に破けるものか? ビックリしました。その夜は地下壕で徹夜して、負傷者の看護をしました。グラマンの空襲は銃撃なので、被害は少なく、四月二十一日のB29約三十機の空襲は、大変でした。庁舎副官部医務科は直撃弾で倒壊、当直将校戦死、副当直将校は右脚切断、負傷者は一般人も含めると、五、六百人、川原に運ばれた負傷者の救急手当に休む暇もなく必死で働きました。時限爆弾の破裂は一昼夜続き、道路は寸断、対岸の崖下を三十メートル程掘下げ、横にくりぬいた壕内に一週間、泊りこんで看護しました。水を欲しがる兵、うめき通す兵、「おかあさん。」と呼ぶ者、負傷者は十坑道中、六坑道まで塞がりました。看護に疲れ壕内の土壁にもたれて、ウトウトすると、右か

ら、左から「ドサッ」と私に倒れかかる者がある。暗い穴の中で、ハッとして飛び起きると、さつきまで虫の息だつた人が、息が絶え、もう冷たくなって、グラッと私にもたれかかっているのです。こんな壕の中で肉親にも、みとられず淋しく死んだ兵士を見た時マキンで火だるまで突入した主人は、どんなに熱く苦しかったであろうと思うと胸が傷み涙が流れて「なむあみだぶつ」と合掌しました。又、夜中の一時、二時頃特攻に出る兵士の為に航空糧食を作り、「帽振れ」で、穴ほこだらけの飛行場の片隅で見送りました。

神風特別攻撃隊宇佐護皇隊の人々は、沖繩の空で、日本の彌栄を信じて、敵機に、又、飛行場施設に体あたりして戦死してゆきました。二十年の三月から八月まではB29とグラマン戦闘機は合同で空襲に来て日本の飛行場は穴ほこだらけになり、飛行機も燃えガソリンも不足がちになり、九七艦攻、練習機までも出撃する状態になりました。米軍はB29やグラマンの新鋭機。日本は古い練習機では勝敗は自らわかつていることで、練習機で出撃する搭乗員は我が身を棄てて行くのにひとしく、命令のままに出撃する兵士の胸中は、いかばかりであろうかと思うと合掌して無事目的地に行き着くことを祈る気持ちになりました。

出られ、空中戦まで戦えた主人は幸福であったと思います。昭和二十年八月までの宇佐空はB29、グラマン合同の空襲で戦うには飛行機がなく、燃料も不足がちで敵の空襲のなすがまといふ状態でした。近代戦争科学戦の時代に徒手空拳にひとしい戦いぶりでは負けるのは自明のことで、将兵の生命のことを考える余裕はなかったのでしょうか?

敗戦後、宇佐市内の小、中学校に正教員として三十六年間勤務して、平和の到来を願い、子供達が自由に発想し、協力して切磋琢磨して伸び平和を愛し、話し合いで物事を解決する習慣と努力すること、何事も人まかせでなく、先ず自分が積極的に動いて物事を解決するように教え、自分も努力してきました。

三人の兄

五十年目に、長い間探し求めていました長兄松永春雄の消息を知る事が出来ました。会長様初め、関係者の方々の並々ならぬ御苦勞を、唯々有難く厚く御礼申し上げます。

長兄は、昭和十一年一月十日、甲種合格で徴兵されました。当時、私はまだ小学二年生の三学期でした。兄弟の中で、一番優しい兄で、十一年四月より海軍通信学校普通科へ入校と同時に、少い俸給の中より、私の為に「小学館」の小学三年生、小学四年生を二年間送り続けてくれました。又私への手紙には、いつも「しっかりと勉強するように」と書いてありました。

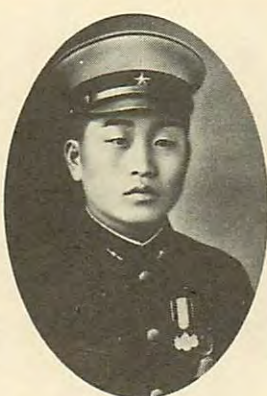
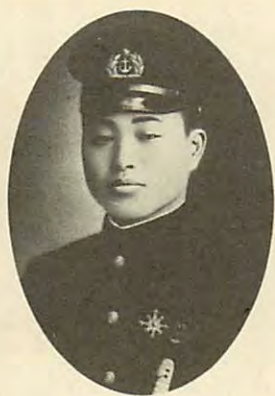
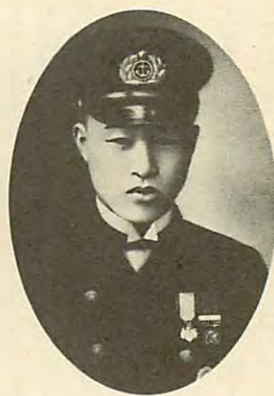
あの当時私の村には、その様な雑誌を読める者は少なく、どんなに私の為になった事か、本当に有難く優しい顔が夢の中に帰ってきます。

昭和十二年に海軍通信学校高等科を卒業し支那事変に参加、その後十六年三月頃から、横須賀局気付、ウ九〇一九の番号で手紙が四十日間隔で、届いておりました。手紙の中に野菜不足だから、野菜の種を送ってくれるようにと書いてありましたので、慰問袋の中に度々野菜の種を入れて送った事が忘れられません。

佐賀県 松永 タツ子
先日は御高配を頂きまして、戦死後

十九年八月二十五日にやはり徴兵で海軍に征っていた次兄の冬雄から「別府港待ッ」の電報を受け、駅長さんに往復乗車券を分けて頂き、面会に行きました。外泊を許された次兄と、親子

右から長兄春雄 次兄冬雄 三兄時雄



戦」で航空母艦千歳と運命を共にしたことを、二十年一月十四日の戦死公報で知りました。

それから二ヶ月後の三月二十日に、海軍兵曹長の長兄春雄が、十九年二月六日に南洋群島方面で戦死との公報が入り、同じ年の七月に、徴兵で陸軍に征っていた三兄の時雄が、十九年四月十九日に、インドのアッサム方面で戦死との公報が来ました。三兄は大陸に行つてから「ビルマ派遣第八九〇三部隊杉浦隊」の住所で、写真と手紙が一通届いただけでした。

一年のうちに男の子三人全部亡くした悲しみに打ちひしがれた母の丸い背中が今も目に焼きついています。

それから母は急に弱くなりました、三十九年一月二十七日に亡くなりました。

さすがに父は気丈に立ち直つて、息子の分迄長生きして、供養致さねばと撰生に勤め、佛前にて朝夕読経しておりましたが、五十年五月十四日散歩中に、交通事故で即死いたしました。突然のことに私は途方にくれましたが、私が頑張らなければと心に鞭打ち、農業にはげんで父亡き後は、私が佛前にて読経をつづけております。

お陰様で今年は、三人の兄の五十回忌の法要も済ませることが出来ました。

三人の兄さん、やすらかに眠り下さい。

戦後同町内の方が復員されて、その方も同じ通信料だったので、長兄がクエ

ゼリン島で玉砕した事が解かりました。

先日お送り頂きました昭和十八年十一月三日撮影のクエゼリン島第六通信隊の写真の前から三段目の左から十人目が私の兄でした。大きく引伸ばして下さったのはつきり判りました。

五十年祭のお忙しい中を会長様の御親切を身に泌みてありがたく存じます。

三人の 三人の兄ごとく
み国のためと言へど口惜し
(平成六年四月四日)

五十年祭を迎えて

埼玉県 大井 和子

終戦から早いもので、半世紀を迎えようとしています。ウオッセに眠つているお父さんには、現在のお母さん、そして五人の娘達のその後のことが想像出来るでしょうか。

私が物心ついた頃はもう父は戦死しており、母が「酒もタバコもやらず、家族思いでほんとうにいいお父ちゃんだった」というその顔さえ全く覚えておりません。

父が戦死した後は母の実家に親子六人が身を寄せ、食べる物も満足になく、特に私は大根の葉等の入った雑炊が嫌いで、母を困らせた事を悔んでおります。

母の実家は農家でしたが、食べる物は出来るだけ自分の手でと、母は着物

を食料に代えて食べさせてくれました。現在ならその気になれば、どんな仕事でもあり、母子家庭でも何とかやって行けると思いますが、何の仕事もなく、しかも十代半ばから五歳迄の娘五人を食べさせなければならず、今の私よりも、はるかに若かった母が、どんなにか辛かっただろうと頭の下がる思いがします。

それでも母には和裁という特技があつて、それが私達姉妹の成長の大きな糧となつたと思います。八十四歳になる現在でも未だに仕立物をしておりますが、この年でこんな仕事をしている方はおそらく町内では他にいないのではないのでしょうか。それが私達姉妹の何よりの誇りです。

五年程前に祖母が町内一の天寿を全うしましたが、その娘である母も、それ以上に元気でいてほしいというのが私達の何よりの願いです。

日本は今や世界一の経済大国となり父の生きた時代には想像もつかない、豊かなそして平和な世の中になりましたが、それらはすべて戦場に散つた人達の尊い犠牲の上に成り立っている事を忘れてはならないと思います。

一方世界では、内戦や民族間の争いで、今尚尊い人命が失なわれており、そんなニュースを見るにつけ、あの当時の辛かった時代と思いが重なり、一刻も早くその解決を願わずにはいられません。

来年三月には一族四十人余りが近くの温泉地で父の五十回忌を行う計画が進んでおり、今から楽しみにしております。

末娘の私も、父の年をはるかに越えて人生の半ばを過ぎましたが、今後は今、失なわれがちといわれるゆとりや、ふれあいを大切にして、五十年前には、考えられなかった価値観、多種多様な生き方の中で、自身に偽りなく生きてゆこうと思います。

お父さん。五十回忌では、孫、曾孫等、直系だけでも三十九人にもなり、きつとおじいちゃんは、目を丸くしてしまうことでしょう。

母さんが夫々を紹介してくれることでしょう。

その日を楽しみにして下さいね。

父 高橋深吉 ウオッセで戦死
母 高橋とし子 宮城県在住

五十年の思い出

香川県 奥田 和広

戦局も急迫してきた昭和二十年四月はじめ、玄関に来客の声がしたので出ようとすると母が応待している。「…昭和十九年二月六日南洋方面で戦死…」あと悼みの言葉を云って役場の人は帰った。間もなく父が帰って来た。云い様もなく悲しかった。而し二十四歳の子を失った父や母は何倍も辛く悲しかったに違いない。毎年四月のこの頃にな

るとあの日のことを思い出す。

兄は昭和十七年一月佐世保海兵団に入団、四月に横須賀の海軍通信学校に入り、六ヶ月の教育をうけ、秋も深まる頃、内地を後に南方に向った。出発の前に母は上京し毎日久里浜に通った。学校側もあたたかく取次いでくれ、一年もしたら高等科に入るから、と元気に出て行った。

しばらくして任地に着いて初めての手紙が来た。珊瑚礁の島で椰子が生い茂り毎日スコールがある。こちらは真夏の正月を迎え雑煮が出た。隊別のカッター競争で何位になったとか、満月が素晴らしい。又数学と英語の参考書を送れ等、何気ないおだやかな手紙がよく来た。今思うと昭和十八年頃のマールシャル方面の風雲は急を告げていた筈である。

通信の部署に居て厳しい戦局は知りすぎるはずで検閲を意識しながらも自らのようすをさりげなく知らせようとしたのを私達はそれに気付くことなくやがて来信も不定期になり、いつしか途絶えた。

それでも便船の事故ではとか一縷の望みを抱いていたがづいに来るべきものが来た。

兄は当時の模範的な青年で、父を助けて家業に励む傍ら勉強もよくし、本もよく読んでいた。毎日日記を書き、出征に際しては教育勅語や顔真郷の臨書を揮毫していった。私とは年齢が一

回り離れていたがよく可愛がってもらった。又羨も厳しく「男らしく」が口癖だった。親にとつては自慢の子であり、兄弟には頼もしい兄であり、友人先輩等誰からも好かれた青年だった。若い兄の写真の前になると還暦を過ぎた今でもなつかしさと畏敬の念を覚える。「横須賀局気付ウオッセ」がクエゼリンの第六通信隊であることを確認したのは戦後の昭和二十一年だった。それからクエゼリンの事を少しでも知りたいたと方々調べたが資料は殆んど見付けることが出来なかった。

昭和三十九年にクエゼリン島戦没者二十年祭のご案内をいただき、同町内の秋山正清様から同行のお誘いをうけた。母と、ご主人を亡くされた馬場様と共に一緒した。当時東京は今と違って遠かったが長い道中、いろいろと貴重なお話を伺った。クエゼリンのこと、お父君秋山門造司令官のエピソード、音羽侯爵のこと、ご自身の軍艦での体験等々、又「お兄さんは優秀だったんですね。六通に配属されたのだから」と云われた。

九段会館での前日祭、同じ島で生死を共にした英霊の肉親が全国から集まり、共に亡き人を偲び長い間の心のしこりがとれた思いがした。遺族会の「環礁」を通していろいろと知ることができた。それでもクエゼリンは遙か遠く望むものだったが、昭和五十年墓参ができるようになった。

私は昭和五十五年七月、第三回墓参団に参加することができた。一行八名は夢にまで見た喜びと未知の不安を胸に成田を飛び立った。窓から見る太平洋は涯しなく、時折り船の航跡や無人の環礁が望まれた。夕陽が沈む頃、トラック島、夜も更け最後の寄港地ポナペを飛び立ち、クエゼリンが近くなってくる時の胸の高鳴りは抑えようもなかった。

クエゼリンでは米軍のお取計いで島内に宿泊を許された。大里さんご夫婦や中田さんに親身も及ばぬお世話になった。毎日慰霊碑にお詣りし、ウィットリー司令官を表敬訪問し、戦跡やイバイ島へご案内して頂き又自由時間も充分あったので、部隊の配備図をもとに中田さんと足で調べた。かつて六根司令部の地下壕跡は幸い記憶されていたので、隣接する六通跡と思える所に立つことができた。この美しい海や空が三十六年前黒く蔽われたことを思わねばならなかった。

昭和五十九年三月、厚生省がマジュロに建立した「東太平洋戦没者の碑」の除幕式に参加した。マジュロを基地に船でマロエラップ、ウオッセ、クエゼリンと慰霊祭を行いながら南太平洋の船旅を体験した。

今年で五十年、アルバムを見ながら歳月の早さを思う。

二十年祭の時、寒気凛烈の拝殿で皇宮警察音楽隊の奏楽「海ゆかは」……。

朝香宮様が奏上された祭文の一句々々……五十五年の暮参から帰国した深夜、成田空港までお迎え下さった浮田会長のお姿……。

いつも謙虚に又海軍軍人らしかった秋山正清様等なつかしく思い出される。父は三十七年前、母は六年前九十歳で他界し兄の許へ逝った。

回想 五十年

岐阜県 渡辺 二三

弟、渡辺三行が、南海の離島クエゼリン島で散華してから、はや五十年の星霜が流れました。この半世紀のあゆみを振り返るとき、さまざまながことが脳裏に浮かび上がってきます。

さて、最初に思い出されるのは戦死の公報ですがそれには「昭和十九年二月六日、中部太平洋方面クエゼリン島ニ於テ敵ノ攻撃ヲ受ケ死体ヲ収容セザルモ戦死ト確認ス」と十九年八月十五日付で、東部第二十三部隊長からのものでした。

それからは現地の実情、どんな最期を遂げたのか、そのあたりの様子を知る術はないものかと、老父母と日夜心寂しく過ごしてきました。

ところが、図らずも二十年後三十九年十二月三十一日の中日新聞で「日の目みる尊い遺産クエゼリン戦没者の貯金が遺族へ」の見出しが目にとまり、内容を読むうち、始めてクエゼリン島

戦没者遺族会の存在を知ったのです。正に、闇夜に光明を得たような気持ちで一杯でした。明けて正月十七日、とびたつ思いで上京し、故浮田前会長様のご自宅を訪ね、遺族会のお話を詳細にお聴きすることが出来ました。

環礁第一号の故初代林会長様のお言葉から、この遺族会は故浮田様及び佐藤現会長様の犠牲的奉仕により誕生したことを知り深く感銘いたしました。

私はこの遺族会に出会ったお陰で、四十年二月六日の慰霊祭に、会員の一人として出席して以来、ただの一度も欠席することなく、今日に至っており大変有難く存じております。

クエゼリン墓苑慰霊碑の製作にあたりましては、碑に装着する、県知事の揮毫入りの各県特産の銘石、又、靖國神社の遊就館に献納されました副碑のものと共に、幸いにも供出のお手伝いが出来ました。これも遺族会のお力添えによるものと感謝しております。

続いて、四十三年八月十七日には、迎賓館での慰霊碑の除幕、清祓式に参列し、御影石に、各県の銘石を組合せて出来た、美しい日本地図を目前に拝見し、これぞまさしく遺族の連帯もあらわしたものと感じ、平和日本の礎となられた英霊に深く思いをいたし、戦争の悲惨、平和のありがたさを遺族がお互に励まし合い協力して、後世に伝えねばならぬと思いました。

平成元年一月には、念願の現地墓参

を果たさせて頂きました。慰霊碑の前にぬかずいた時は、万感胸に迫り、生涯忘れることのない感動を覚えました。これも故浮田様、佐藤現会長様他役員各位のご尽力により実現したもので、心から感謝申し上げる次第です。

ここで改めて、戦記、クエゼリンの今と昔、殊に終章の南洋部隊の防衛作戦会議と玉砕戦準備、そして環礁第五十三号より連載の、「北満からマーシャルへ」を読んで、亡弟の南方からの最後と思われる手紙と照合した時は、ひところ漠然としていた部隊の戦跡が鮮明に写し出され、真に感慨無量なるものがありました。

最後に、環礁第五十号の矢野雄三様と、第五十六号の秋元輝夫様のお二方がご執筆の一部を引用させて頂き、本稿の終りといたします。

(一)北辺の地満州から、遙か南海のこの離島に送り込まれたばかりの、陸軍一〇旅団主力(約二、七〇〇名)は、上陸後わずか数週間にして、一艦一機の来援もなく、圧倒的な敵先制力の前に、あえなく全員が玉砕、それは陸海作戦指導部の混乱と亀裂が生んだ、余りにも虚しい犠牲であった。
(二)あの北満の果てから、はるばる何んのために我々は、このマーシャル群島に来たのであろうか。日本と米国の戦力の差、大本営の作戦の手違いと申ししまえばそれまでであるが。

父の遺品 軍隊手牒

愛知県 伊藤 つや子

父、伊藤綱五郎は、昭和十九年二月六日にクエゼリン島で玉砕しました。父のことは家に残された古びた一冊の軍隊手牒だけが知っています。手牒の中からところどころ抜き書きしてみました。

氏名 岡村綱五郎(後養子縁組により伊藤と改姓)
明治参拾四年七月拾壹日生

略歴 第十九師団歩兵第七十五聯隊

大正十年十二月十三日入隊

同年同月十七日朝鮮国境警備

大正十一年十月二十六日帰休

大正十三年、同十五年簡閲点呼

昭和二年勤務演習

昭和三年五月九日動員下令

同年五月十一日歩兵第六聯隊補

充隊第四中隊へ充員召集

同年五月三十一日召集解除

昭和五年、七年簡閲点呼

昭和十二年八月二十四日動員下令

令輜重兵第三聯隊應召、第三號

野戦自動車廠に編入。十月十七

日北支大同着支那事変勤務に従

事、北支那野戦自動車廠に転属

昭和十四年一月三日大同出發交

代兵到着帰還
以上で父の軍隊手牒の記載は終わっており、引続いて昭和十六年十二月



八日大東亜戦争となり、父は「此の度の戦は、今までと違い国民全部が一致団結して戦わねばいけない。もう一度御奉公致さねばならない」と昭和十七年六月海軍軍属を志願し、横須賀海軍建築部より戦争に行きました。

軍事郵便には横須賀郵便局気付ウ九〇ウ六〇ウ八三の記号でどちらの方面やら分からず母とただただ無事である事を神仏に祈る毎日でした。

ある日、突然父と一緒に働いていたという方が尋ねてこられ、色々父の様子を知らせて下さいました。クエゼリン島で元気に働いている由。本当に夢の様で母と喜びました。がそれも東の間、戦局は緊迫し、遂に昭和十九年二月六日米軍の大規模な攻撃を受け、全員壮烈な戦死の報道を二月二十六日の中部日本新聞によって知りました。新聞には「同島基地設営工作に勇躍挺身せる軍属二千名も敵大軍を迎え、守備隊勇士と共に最後まで不撓不屈の奮戦を続けた後、囚虜の辱めを受くる事なく勇士と運命を共にせる事実は、国民の心肝に一入深き感銘を与えるもので

ある。」と称えてくださった事は、父にとって本望であったと思います。昭和二十九年十月二十六日母も五十二歳で亡くなりました。

昭和五十三年八月マーシャル方面遺族会の皆様と、クエゼリン島へお参りに行っていました。米国の軍事基地となっており、一時間しか供養が出来なく、後髪ひかれる思いで帰りましたが、地下に眠る父も喜んでくれましたことと毎日冥福を祈って居ります。合掌

新雪の降りくる社に五色の幟はためき御霊なくさむ

たくましく育つを願ひ靖國の父の御前に曾孫の名を告ぐ

私の歩いた五十年

秋田県 奥山 キノ

十二月八日は忘れることのない記念日です。私はこの時結婚はして居りましたが、田舎に帰って二度目の教職についていました。小学四年の担任でした。全校集会で校長先生のお話。教室で私は戦艦陸奥、航空母艦赤城、潜水艦のお話をしました。翌年三月退職、主人が陸奥から陸上勤務になりましたので、長崎に移りました。

武蔵の進水を山の上から拝見し、あまりに巨大で、衝突しないか心配しました。其の後内装備で呉港に移動、私も呉に移りました。夜買い物に出てい

る時、ハワイ奇襲のラジオニュースを聞き、其の後館山に移り、私も久しぶりで横須賀の家に帰りました。

夫は十八年二月より友成部隊に転勤しました。三月三十一日夕方小雨降る中東京丸での出航を日の出町の岸壁で見送ったのが最後でした。戦地からのたよりは、すべて生まれる子供の事だけでした。名前まで付けて行きました。玉碎四十日前に予定より早く待望の男の子でしたのですぐ便りしましたが、返事がないので知ったかどうかわかりません。一度だけでも「日出夫」と呼ばせたかったと心残りです。

其の息子も三人の子(長男、次男とも大学生、長女中二)の父として新潟で会社勤めをして居ります。

私が此の会に参加させて戴いたのは五十一年二月からです。直会は霞ヶ浦でした。其の年の十一月、藤平様の呼びかけで一行十名現地で三十三回忌の法要を致しました。ナウル、マキン、タラワ、グアムと慰霊巡拝を致しました。二十五日玉碎の命日、タラワで藤平様の用意した材料で、参加した女四人でアンコのついたダンゴ、赤飯、白いご飯を作りお供えしました。ダンゴを沢山作り現地の参加者にも食べて戴き、オイシイと喜ばれました。

私は五十三年度厚生省主催の巡拝に参加させて戴き、其の年はタラワからの遺骨四体を持ち帰りました。其の後浮田会長様、役員の皆様のお力添えで

南瀛の碑も出来、続いてマリア観音像も完成し、私は其の竣工の式典に参加し、感謝の気持ちで慰霊と平和を心の中で唱え、テープカットをさせて戴きました。墓苑は幾度行ってもきれいに整備され、いつの慰霊の時も沢山の住民が参加して盛大に供養が出来ました事を感謝しております。

十八年六月現地より砲術学校に入校した水兵望月さんからタラワの生活の様子を伺っているので、訪問の都度砲台、司令部、トーチカ、火薬庫跡と確認してきました。食糧、水の不足、玉碎の状況は本などで想像するだけです。また会のお陰で九月まで隊長さんと一緒に生活された廣田様ともめぐり逢い色々とお話を伺いました。今でも文通してはげまされて居ります。

昨年は病気で息子の住む新潟でぶらぶら、秋田の我が家でぶらぶらしながら、我が家での五十年の法要も行いました。これからは健康の許す限り会に参加して皆様の元気なお顔を拝し、私の生きる力にしたいと願って居ります。お礼が後になりましたが、佐藤会長様役員の皆様ご苦勞様です。会の発展のため、何時迄も健康で頑張っ下さるようお願いします。

五十年を顧みて

富山県 村楳 光栄

平成五年二月六日、クエゼリン島で

玉砕した兄棚橋千次郎の五十回忌を厳かに無事に行いました。思えばもう五十年が経ってしまいました。昭和十九年二月六日クエゼリン島に於て玉砕の公報を受け、一片の紙だけの遺骨箱が届きました。当時はとても信じ難く何処かで生きて居るのではないだろうか、そのうち復員して帰って来るのではと、思ったものでございます。

南方から生還された方と聞けばお尋ねしていろいろ状況等を聞いたりもしました。母はお墓の傍に兄の石碑を建立致しました。石碑の裏側に「大東亜戦争に従軍し南方マーシャル群島クエゼリン島の守備に当る昭和十九年二月一日米軍上陸となり同月六日全軍玉砕戦死」と刻んであります。浮田前会長様から遺族会のことを伺い、昭和三十九年の二十年祭から参加させていたいただきました。

いろいろ戦地のお話等も聞かせていただき、母は大変感謝して居りました。以後毎年の慰霊祭には弟か私かが付添い直会にも参加させていただいて居りました。母は参加できることが唯一の心の支えでもありました。戦死者の遺族の方が幾多の苦勞を重ねそれを乗り越えて励んでこられたと同じく母も一生懸命頑張って生きて来ました。母がよく弟や私に「後を頼むよ 現地へ行けるものなら行ってみたい」と申して居りましたがその望みも果せず昭和四十六年八月、八十二歳で此の世

を去りました。

昭和四十六年浮田会長様から靖國神社にクエゼリン島慰霊碑の副碑を奉納するお知らせを受け、富山県の名石「油石」を石材店にお願いして七月に贈らせていただきました。いま遊就館に安置されて居ります。お役に立つことのできたのを嬉しく思います。

昭和五十九年三月「東太平洋戦没者の碑の竣工追悼式並びに慰霊巡拝」があり、かねてから亡き母の念願でもありました現地クエゼリン島の参拝が叶い、慰霊碑の前に額ずきお詣りした時には今までの張りつめていた気持ちが一度に涙となってこみあげどうする事も出来ませんでした。あの感激は終生忘れることはありません。クエゼリン島は艦砲射撃、爆撃、飛行機による機銃掃射で焼きつくされ、椰子の木が一本だけ残ったのみで、誰一人生き残ることが出来なかったのを、この目でこの地を確かめ、戦争の悲劇を二度とくりかえしてはならないと、平和を強く願うものでございます。

平成四年三月、実家をついでいる弟が「お互い年老いてゆくのので今のうちに、兄の戸籍が、南方方面で戦死」となって居るのを玉砕した島名等を書き加えて正しい記録の戸籍を残して置きたい」と言いますので、佐藤宗丕会長様にお願ひして、厚生省への取次ぎ等大変御尽力いただきました。戸籍の訂正は大変手数掛かるものでございま

したがお陰様で裁判所の許可書を戴き、今年の五十回忌までに間に合いました。毎年慰霊祭、直会に参加させていただき、その時々アルバムが幾冊にもなりました。

高齢化の進む中、いつまでもこの会が続いていくことを願っております。

靖國神社に御奉賛を！

会長 佐藤 宗丕

昨年八月以来の、細川前首相の「先の大戦は侵略戦争、間違った戦争云々」の発言、主要閣僚による「戦争の反省と謝罪の国会決議」構想、衆議院議長「アジア諸国への謝罪旅行」意欲表明など、敗戦後遺症の傷の深さに胸の痛む今日この頃です。

七ヶ年にわたる巧妙な占領政策によって洗脳された一部の勢力は、手を代え品を代え日本を犯罪国家に仕立てあげようとしています。大東亜戦争は断じて侵略戦争などではありません。我が国の自存自衛のための正義の戦いでありました。

悪名高い極東国際軍事裁判を主催したマッカーサー元帥でさえも、昭和二十五年十月十五日にトルーマン大統領に対し「あの裁判は誤りであった」と語っています。翌二十六年五月三日、米国内閣の外交、軍事合同委員会では「日本が第二次大戦に赴いたのは自国防衛のため」と証言しているのです。

国家の要請によって国難に赴き、国に殉じた崇高な行爲を、国家、国民が賛仰し、最高の礼を以て奉慰するのは古今東西を問わず人類共通の道徳であります。我が国では自らを責めるに急な余りか、または媚び諂いか、祖国を誹謗し、父祖を蔑む風潮が加速してあります。この途はやがて靖國の英霊に対する非礼乃至軽視、否定へ続くものと案じられます。

靖國神社は御祭神に最も身近な私共が将来とも力を合わせて御奉賛しお護りしなければなりません。

このことは昨年八月にもお願いして大勢の御協力を頂きましたが、五十年祭の年に際し、靖國神社の末長き御安泰のため重ねてお願い申し上げます。

五十年祭記念写真の注文について

去る三月二十七日の記念写真入用の方は次の要領でお申込み下さい。

○大きさは20×25センチ(六ツ切)

○代金は送料共一枚一二〇〇円

○郵便局備付けの払込通知票に、口座番号「東京71092168」加入者

名「ツカモト写真館」と書き入れ、ウ

ラの通信欄に「マーシャル五十年祭写真、枚数、金額」を記入してお払込み

下さい。尚写真館は「〒164東京都世

田谷区若林一―三三―四。電話〇三―

三四―四一―四七―一〇」です。代金払込

後約三週間で配達されるそうです。

厚生省主催 マーシャル・ギルバート諸島慰霊巡拝

平成五年度の、厚生省主催マーシャル諸島・ギルバート諸島慰霊巡拝は概ね次のとおり実施されました。

十一月二十九日(月)午後一時三十分から、厚生省で結団式。加納援護担当審議官と船久保団長の挨拶のあと団員紹介、日程説明、諸手続きを終えてバスで成田へ移動 成田泊

行動概要

11月30日(火) 10・00成田発、15・55グアム着。グアム泊

12月1日(水) 08・15 グアム発、

18・45 マジユロ着。マジユロ泊

12月2日(木) 1・2班はマジユロ巡

拝、マジユロ泊。3班は08・00マジユ

ロ発、10・00タラワ着。タラワ泊

12月3日(金) 1班は09・00マジユロ

発、クエゼリン、ロイ・ナムル巡拝。

2班は08・00マジユロ発マロエラッ

プ、ウオツゼ巡拝。3班はタラワ巡

拝タラワ泊。1・2班はマジユロ泊

12月4日(土) 1・2班は周辺海域洋

上慰霊。3班は16・15タラワ発、18・

15マジユロ着。各班共マジユロ泊

12月5日(日) 各班マジユロ巡拝

12月6日(月) 「東太平洋戦没者の碑」

前で合同追悼式

12月7日(火) 11・00マジユロ発、

17・05グアム着。グアム泊

巡拝団参加者

12月8日(水) 07・00グアム発、10・55成田着解散

第一班(クエゼリン、ロイ・ナムル)

班長 橋爪 順子 添乗員 永井 利勝

小納谷力蔵 小納谷正治 桜井 満

相川 孝夫 宮沢 勝 横山きくよ

井口チイ子 平野 実 岸 安男

萩原 誠 石沢 洋子 赤沢 隆

松友 公子 馬場 常

第二班(マロエラッ、ウオツゼ外)

班長 島村 力夫 添乗員 糸川 智

伊勢 照男 瀬谷房之助 廣瀬 定次

加藤 善平 福島 豊弥 高木庄一郎

大島 義治 工藤 照子

第三班(タラワ)

団長 船久保慶作 添乗員 田村 亮一

近藤キクエ 楠 宗親 中塚 光男

中里 桂五 菅谷 愛子 石井 一正

青木 武晴 市村よし子 戸張美喜子

佐藤 俊雄 阿久津善三 柚村 栄

(団長と班長は厚生省職員 添乗員は

小田急トラベル社員 遺族34名)

慰霊巡拝に参加して

一班 萩原 誠

機中に差し込む光は鮮烈で胸を締め付けける。夕陽に映える環礁は美しすぎて悲しい。昭和十九年二月、この夕陽を、この地で散華された方々はどんな思いで見られたのだろうか。ふっと我が身に置き換えてみると胸が熱くなり一瞬間の中が真白になる。五十年にわたり肉親を待っていた英霊にあと僅かである。マジユロに向かう飛行機のエンジンが心の鼓動をいやがうえにも高めてしまう。

十二月二日、マジユロの朝はさすがが美しい。散歩していたら初老の住人が缶ビールを片手に朝からご機嫌だ。戦後ハワイから移住したという。なんとものんびりしていて南国らしい。旧日本軍の防空壕は、住民の住居と隣り合わせにある。椰子の木にロープで渡した色鮮やかな満艦飾の洗濯物との対比が歴史の流れを感じさせる。

夕食は山口雄平さんのレストラン「石の花」で。食事前山口さんが歓迎のスピーチをされる。「昨夜は当地では滅多にない大雨が降りました。皆様に来られるので戦死されたかたがたの嬉し涙だったのでしよう」と。氏はご家族ともどもマーシャル共和国で努力して現在の確固たる地位を築かれたという。政治経済、文化、歴史にもなかなか精通しておられる。

マーシャル語にゾーリ(草履)アミモノ(編物)デンキ(電気)ニカイ(二階)ヤキユウ(野球)ヒジョウシヨ

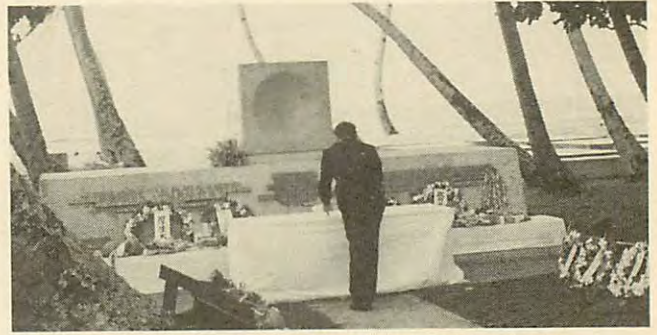
ク(非常食)などの日本語が使われていますと披露された。これらの言葉はいずれも生活用語で今なお残っているのは、委任統治時代の名残り。現地と日本がいかに深い係わりをもっていたかがうかがえる。

十二月三日、五時起床。肌を刺すほど強くなったシャワーで身を清める。朝食後六時マジユロ空港に向かう。皆さん多少緊張した面持ちだ。

先発のマロエラッ、ウオツゼの班を見送ったあと九時小型双発機でクエゼリンに向かう。機内みんな押し黙ったまま窓外を見ておられる。心中去来するものはなんだろうか。十時半雲の合間より鳥影が現われ静かに着陸する。ああついに来た。ここがクエゼリン、万感胸に迫る。

米軍基地のため入国審査の手続きは全く直接プライベートルームに案内される。「ようこそおいでくださいました」報道官のマリアンヌ・ディオオンさんと、アキ・ホルさん、ヒサコ・クリーブランドさん、英子・ラポイントさんら関係の方々の出迎えを受ける。手造りのケーキ、クッキーそれにクエゼリン環礁全景の九四年カレンダーを全員に配られる。なんとという温かいもてなしと心遣いか。軍事基地は鉄条網と武装した兵士の姿を想像していたがそれらの光景はどこにも見当たらない。全く開放的で明かるい雰囲気驚いてしまう。今までの緊張感が一瞬のうち

十二月一日、クエゼリン島の上空、雲の間より西の空に沈む夕暮れの太陽、



日本政府を代表して追悼の辞を述べる船久保団長

に消える。

「さあ、島内をご案内しましょう」既にバスが用意されている。撮影禁止と聞いていたので「写真を撮っても良いでしょうか」「どうぞ、どうぞご遠慮なく」との答え。しまった!! カメラには数コマのフィルムしか残っていない。島内一周して戦没者墓苑へ。この墓碑は昭和四十三年マーシャル方面遺族会が建立したものである。墓碑は椰子と芝生に囲まれ明るく安らんでいる。周囲を清め祭壇に日本国旗を掲げ、日本出発の際、佐藤会長からお預りしたお供え物の靖國神社の御神酒、虎屋の羊かん、お茶、たばこ等を供えた。橋

爪さんの司会で黙祷。順次一人一人献花する。ロイ・ナムル行きの飛行機の時間が迫り、惜しむ気持を残してクエゼリン島をあとにした。

クエゼリンから再び双発機で三十分、正午ロイ・ナムル空港に着く。空港にはクーロンク夫妻の出迎えをいただき、バスですぐ食堂に案内される。なんと椎茸、干瓢入りののり巻が用意されているのではないかと。節子・クーロンクさんがわれわれ一行のため大変な時間をさいてつくられたのだ。本当に美味しい。ほうじ茶と食堂特製のアイスクリュームもご馳走になる。そのお心尽しに感謝の言葉もない。

昼食後ロイ・ナムル戦没者墓苑へ。墓苑は広い敷地にきれいに木のフェンスで囲まれている。墓苑の正面には「ロイ・ナムルの防衛に命を捧げた日本兵士ここに眠る」と英語で立派な碑が建てられている。聞くところによるとこの墓苑は米陸軍退役大佐フランク・セラフイニ氏の御努力によって作られたという。アメリカのふところの深さを感じさせられる。私の父はこの地で散った。戦い終わり平和が戻った。設けられた祭壇にぬかずく。墓前では、あれも報告しようこれもお話ししようと思っていたことが走馬灯のようにクルクル回りただ手を合わせるのみ。節子・クーロンクさんは時にふれこの墓苑を訪れ、お水、お線香をお供えいただいているという。きっちり管理していただい

いるアメリカ政府、そしてクーロンクご夫妻に衷心より感謝申しあげる次第である。

墓参のあとバスで島内をご案内いただく。旧司令部跡が生々しく残されている。幾層もの鉄筋が入っている建物のコンクリートにそつと触れてみると建設当時の息吹が伝わってくる。椰子の木の向うにセルリアンブルーの海と真白な砂浜が見える。お許しを得て砂浜に出て一握りの砂を収集する。純白の砂。大切に持ち帰り父のお墓に埋めようと思う。

安堵と感謝の気持ちを胸一杯に抱きロイ・ナムルを離れる。離陸前窓外を見るとクーロンクご夫妻が手を振っておられる。マジユロへの帰途クエゼリンで飛行機を降りかえる。その空港ではヘーゼル司令官が一行全員に握手されお別れのご挨拶をされる。数時間の本当に短い滞在ではあったが、一ヶ月も二ヶ月もいたような感じがする。現地の皆様温かい心情に接し心よりお礼を申しあげ、有難く思った次第である。

十二月五日、マジユロ平和公園にある東太平洋戦没者の碑の前で合同追悼式がマーシャル共和国厚生大臣エビリン・コーノ氏の来臨を得て厳粛に挙行された。厚生省島村さんの司会で黙祷のあと日本政府を代表して船久保団長、遺族側より戸張さんの追悼の辞、エビリン・コーノ氏のご挨拶があった。厚生大臣、各都道府県知事よりいただいた

た献花を遺族一人一人が霊前にお供えする。正装の船久保団長は「尊い戦没者の犠牲のうえに現在の日本の発展があった」と述べられた。国を思い無念にしてこの世を去られた戦没者の方々にはこの言葉を聞いてさぞ喜んでおられるに違いない。

国家とはなにか、そして国際社会の中で国民の在り方など痛切に感じる。今回かくも素晴らしい慰霊ができたのは厚生省、各都道府県、遺族会、小田急トラベルの方々のご支援があったからだ。心より感謝申しあげる次第である。

クエゼリン島での慰霊

千葉県 相川 孝夫

クエゼリン、ロイ・ナムル(旧ルオット)方面第一班十六名は、小型プロペラ機に搭乗してマジユロ空港を7・40離陸。一路クエゼリンへ。

やがて白雲の間から、美しいエメラルド色の環礁が見え始めた。巨大な白いレーダードーム、よく管理されている緑の芝生、椰子の樹木等が大きく迫って来た。9・00多年宿願のクエゼリンの地を踏む。時に平成五年十二月三日。玉碎の日(昭和十九年二月六日)より約半世紀の永い歳月が流れた暑い日であった。兄真吾廿二歳の終焉の地であると思うと万感胸に迫り来るのを覚える。

しかし、我々一行を航空事務所の米

国の女性と二名の日本女性が、ケーキや湯茶で歓待して頂き心も和んできた。この島は米軍の重要な基地であるが、今日は特別に許可されて墓参が出来るのは有難いことだ。

休憩後軍用バスで墓苑に行く。驚いたことに、芝生は実にきれいに手入れされ、ゴミ一つ落ちてない。苑内は白塗りの低い木柵で囲み、中央に立派な墓碑が建立されていた。入口に朱塗りの鳥居があり、その上に「日本人墓地」と JAPANESE CEMETERY と和英両文で書かれた額が掲げてあり、何か奇妙に感じられたが、極めて印象的であった。

私達は早速協力し合って、慰霊祭の準備に着手。先ず墓碑を日の丸でおおい、次に白布で包んだ仮祭壇を設けた。そして、「マーシャル諸島戦没者之霊」の位牌を中心に置き、左右に厚生大臣の花環を飾り、各自が持参した供物等を供えた。私は、兄の好物であった羊羹、菓子、リンゴと家族の写真を上げた。又、マーシャル方面遺族会長の佐藤さんより依頼された、靖國神社の神酒、水、菓子、煙草も一緒に丁寧に供えたのである。線香やローソクがともされ、準備も O・K。愈々慰霊追悼式が肅々と執行。団員は、陸海将兵六千余の御霊に対して敬虔な黙祷を捧げた。その後一人ずつ、墓前に額つき礼拝合掌。なかには般若心経を唱える者、何か小声で語る者、嗚咽する者様々であつた。「真吾兄逝いて茫茫たる暗黙髣髴たる温容呼べども答えず。」正に愛惜の情、切々と胸に迫り来たのは私一人のみではないと思う。私達は、無念の玉砕を遂げた戦士の御霊に対して、ひたすらに合掌し永遠に安らげられと、心より祈念するのみであつた。しかし、今この島は実に平和そのもの。ゴルフ場、立派な建物、シヨッピングセンター等があつて、五十年前、日・米両軍が熾烈な戦いを展開されたとは思えない至極奇麗で静かな珊瑚礁の島であつた。

慰霊祭終了後、私達は祭壇や鳥居をバックに記念写真を相互に撮り合つた。いつまでも現地滞りたいが、次の日程があるため後始末してから墓苑を辞した。約一時間余りの追悼供養であつたが、鎮魂の誠が捧げられたと痛感したのである。

ロイ・ナムルでも同じように慰霊祭が執行され 15・40 クエリンに着。砂浜で珊瑚、貝、黄金色の砂を記念に拾う。

夕刻、米陸軍大佐ヘイゼル司令官が態々事務所に来訪され、にこやかに歓迎の挨拶をして下さる。そして、帰り際、私達団員一人ひとりと固い握手をされた。今日この日の感動は、生涯忘れ得ぬ思い出となるであろう。

九泊十日という長期の南溟の旅であつたが、厚生省、小田急トラベルの職員のお蔭により、所期の目的である慰霊

巡拝並びに追悼式が、盛大にしかも厳肅裡にとり行われ、全員恙無く帰国できた事は誠に大慶に存する次第である。歌一首を添えて各位に多謝す。

海碧く 緑の芝生の椰子木立
潮騒聴きつつ みたま拝む

(加茂地区遺族会長)

戦地からの便り

福井県 塚田 民子

発信者 海上機動第一旅団衛生隊

陸軍少佐 塚田 重一

昭和十九年二月二十四日戦死

発信地 トラック島

発信日 昭和十八年十二月二十八日

戦没地 ブラウン島の発表でしたが昨年エンチャビ島の生き残りの方(伊藤武さん)が父の最後の突撃の様子を知らせて下さいましたので戦没地はエンチャビだと思えます。

拝啓 出発以来既に二十日を経過して、二十八日となった。既に懐かしい実家に一同元気で引き上げた事と思つてゐる。余りの至急事で家の事も出来

ず、心あせつて細かい相談も出来ず総てをまかせて、どんなに心苦しい、御苦勞を掛けたい事を感謝してゐる。

途中、小林茂治君(注・英霊の従弟で安東警備の憲兵)に会ふべく尋ねてみたが丁度外出中の事で、其の機会も得ず、又吾等の通過も知つてゐなかつたのだらう。約一時間半位の停車だったが残念でした。

舟の中の手紙で、行先は判明してゐるが、防諜上詳細知らせない。「ヤシ」の木陰で何んとか言ふ、〇ー〇。〇群島の某孤島と聞く。無人島らしい。不自由、不便苦勞は、どこも同じです。これも国家の爲なら何んとも思はない。よろこんで死に就く決心です。親子共に、既に出発時決心はしてゐると思ふ。子供の養育には、女手一ツで御苦勞だが、此れが民子の専任であれ、萬一生還を期し得たれば、其の時はどんなに喜ぶ事だらう。

陽はカンカンと照り海面はキラキラ眼を射る如き感深し。禎一の転校は如何になりしや。禎一も今が一番大事な時です。克く監督監視を要します。留守宅渡しも三月より二百五十円送金する事とした。御承知下さい。斯して手紙を認めているが、手の甲から汗が出続きます。もうしばらくで、汗疹も出て来る事です。四、五日でお正月と言ふのに、全くそんな気分も出ません。正月は航行中の事と存じます。

十四日釜港出発以来、内地の土を一



寸も踏む事なく連続航行で冬物の総ては御送りする事も出来なかつた。夏物も少なく不便だが、何んとかやつて行こう。遠く砲声を聞きつつ航行中です。降雨が多く、毎日湿つたつて、連日蒸し暑い思ひです。こんな事ならもつと、準備もあつた事と今更残念に思つてゐる。然し、今にも判らぬ命、そんな欲深き事はオカシイ事だ。

大義の為に死す命、決して死ではない。我が心霊は永久に生きてゐる心算です。自分も民子の決心しある事を喜んでゐる。戦死の報に接しても、決して心配するな。子供の二人を夫と思つて養育されよ。吾は何も遺言もなし。後顧の憂もない。家族一同仲良く明朗な生活を乞ふものである。

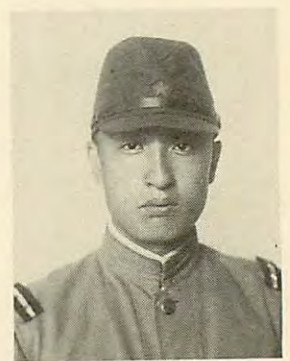
一族一家代々国家の為につくし得る塚田家の光栄を満足に思ふ。(注・英霊の父も旅順攻撃で戦死)ではこれで失礼、度々手紙も出せない事と思ふ。御無沙汰中は達者なるものと思つて下され。呉々も子供の事を頼む。では御達者で、

十二月二十八日
民子様

重一

新潟県 齋田 ヨシエ
陸軍兵技曹長 田中 敏

大正五年二月二日生
昭和十一年満州哈爾濱工兵隊
に入隊後、海上機動第一旅団



第二大隊へ。十九年二月六日
クエゼリンに於いて戦死

ハ爾濱より北満へ汽車で十時間、この北安鎮に参りまして早三日です。去る四日優秀者教育の助教として、当地に参りました。特業教育検閲後の特別教育をこの北安で、一部の人員のみ実習するのです。

分隊長として又監督として、専修下士官として重任を帯びて参りました。何も彼も責任を持たされて来た以上、立派な教育をして、技術下士官として恥じない様努力して、ハ爾濱原隊に帰還の日を、一日千秋の思いで待つて居ります。

兵が風邪を引きはせぬか、寒さの為に怪我が多くなりはいしなやかと、心配ばかりして居ります。
ハ爾濱と違い寒さも零下三十度から四十度です。防寒帽の垂を下ろして居ても顔が痛いですよ。工場内の作業でも、寒さは一しほ身に沁みます。内務教育と違つた軍紀、風紀に就いて万全を期して居ります。

では出勤中の御無音を今よりお許しを願つておきます。

昭和十六年七月七日北安鎮より

永らく御無沙汰致しました。

御元氣にてお暮らしの事と思ひます。

お陰様で敏は元氣です。

父上様から贈られた立派な日本刀がハ爾濱に無事到着いたしました。

深く感謝いたします。

六月一日附を以て陸軍兵技曹長に任ぜられ身に余る光栄に感泣致して居ります。六月一日附であります軍司令部よりの命令が遅れて七月五日部隊本部の方に到着したのです。

この上は益々聖諭を奉戴し一意任務に邁進致す覚悟であります。最後の写真と思ひまして撮りました。門出と進級と二つを兼ねた記念撮影かも知れません。門出の時がいつになりますか進出の出来る日の来るのを非常に嬉しく待つています。

その時は住みなれた我家兵舎に三度お別れを告げて、部隊本部の菊の御紋に決別、歩武堂々祖国日本の為に勇躍第一線に颯爽として征途につきます。

ではこれにて失礼いたします。

昭和十九年一月十四日(発信地は書いてないがクエゼリンと思われる)。

苛烈なる決戦場に今到着いたしました。敏は基地の守備に邁進し全力を尽くします。父上様母上様、妹、弟たちをよろしく頼みます。

(田中敏命の妹)

五十年を顧みて(二)

ナウル島警備の想いで

会友 江村 源次

私は、昭和十六年九月から横須賀砲術学校に勤務していましたが、十八年二月十五日に第六十七警備隊分隊長に補せられました。六十七警は第四艦隊第三特別根拠地隊所管で、ナウル島警備の新編成部隊として横須賀海兵団で出陣の準備を進めていました。准士官以上約十名、下士官兵約四百名で、指揮官は山口勝三中尉、私は次席でありました。

既に東京湾外に米潜水艦が出没しており、被害をうけた艦船もあつて、生還を予期する者は居なかつた。敵潜にやられたため、晒一反を腹に巻いた。鱈は自分より長いものは襲わないと聞いていたからでありました。

三月三十一日夕刻、全員東京丸に乗船、一路ナウルに向かつた。船は昼は東に夜は南に針路を変え、時には蛇行運動をし、敵潜にも敵機にも遭わず、四月十五日に無事にナウルに入港しました。直ちに第一高角砲台長を命ぜられ、昼夜兼行砲台の建設整備、陣地構築を急いだり、四月二十一日午前七時四十分敵機十二機来襲、滑走路大破。午前八時十四分B 24十二機来襲、重油

槽火災。以後度々敵機の空襲に見舞われた。五月二十三日各砲台の築城作業完了し、各部署の訓練、陸戦教練を實施しました。

六月八日、駆逐艦江風と海風から洋上でゴム袋入りの糧食の補給をうける。

六月十一日、生田丸から糧食他の補給をうける。

九月八日頃から、アマーバ赤痢が拡がる。

九月十一日、北昭丸入港直前魚雷をうけ、弾薬、糧食等満載のまま爆沈。何とも口惜しい限り。生存者四十名を救助したのでした。

九月十八日、午後十時より翌朝まで、延二百数十機の空襲をうける。

タラワ、マキンは連続空襲をうける。

十一月十九日、未明より敵艦載機一〇四機の大空襲。タラワ、マキン両島は敵艦載機延九一八機の空襲をうける。

十一月二十日、タラワ、マキンは徹底的な砲撃により我が重砲火は沈黙、地上建物はすべて破壊される。

十一月二十一日、タラワ、マキンに敵上陸。激戦の末十一月二十五日柴崎司令官以下玉砕。ナウルより応援に出撃した航空隊員も共に全員玉砕した。

無念やる方なし。

十一月二十八日、糧食欠乏主食六ヶ月分、副食二ヶ月分により、減食。対空戦闘の合間に南瓜作りに精を出す。

十二月九日、未明より艦載機の大空襲。戦艦六隻、巡洋艦四隻、駆逐艦四

隻の砲撃一時間、続いて又々空襲。この日の被害は驚く程少なかったが、敵の上陸必至と覚悟したが、之はひとまづ避けられた。

十九年一月、第四高角砲台長拜命。

一月三十日、敵機動部隊はマーシャル群島の各島に来襲、特にクエゼリン、ルオットは主目標とされた。

二月一日、敵は戦艦以下十七隻の艦艇、四五隻の輸送船でクエゼリン、ルオット急襲。激戦の末二月六日秋山、山田両司令官、音羽六根參謀以下全員、玉砕の悲報。沈痛、唯肅然。

二月十七日、敵機動部隊トラック急襲被害甚大。

二月十八日、米機動部隊ブラウン環礁急襲、十九日上陸、戦闘は二十三日まで続いた。(事実上玉砕であったが大本営は発表していない)。

三月五日、糧食欠乏のため減食強化。

四月二十四日、魚撈班を編成。蛋白の補給をはかる。

五月一日、海軍大尉に任ぜられる。

五月中旬、従来の農場を整備し、南瓜、甘薯等の自給作業拡充。

六月三十日、敵B25十一機来襲、一機を直撃弾で撃墜したところ、後続機は編隊を解いて爆弾を捨てて遁走したが、高角砲台員三名戦死、重傷者一名を出したの残念でありました。私は

ナウル在勤中米機と千回以上の対空戦闘をしたが、微傷も負わなかったものの、大ぜいの仲間を失ったのは残念で

した。ナウルより東の島々は皆海拔一〇二米の珊瑚礁なので土は無く椰子以外の植物は殆どないに等しい状況で食糧自給には大そう難儀しようだがナウルには、幸いに山も湖もあり、南瓜や甘薯栽培に適していたことはありがたいことでありました。

今、五十年前を思い起し、平和と繁栄を謳歌している日本を見るにつけ、未だ還らぬ戦友たちとその御遺族を思い、胸の痛みを覚える次第です。

五十年を顧みて

宮崎県 山内 キク

主人の入隊を見送るため大阪から郷里に帰る途中、鉄橋の下を見て水をほしがって泣いた子供も五十二歳になりました。

主人と最後に会ったのは、大阪を通る軍用列車で、私は体を悪くして子供を負う事が出来ず、祖母に負って貰い、一足先に梅田駅に向かいました。

両親は近所のタバコ店に走り、当日の配給を分けて貰い、近所の人たちは配給のお米を出し合い、おむすびを作って列車まで持ってきて下さいました。

こぼれるほどの車内から「山内ここから出よ」と皆で窓から主人を押し出して下さいました。両親に「行って来るから元気で」と言い、私の顔をじつと見ていました。きつと青白い顔をしていたのでしよう。子供をだいたいの

一分位でした。列車の中に「皆さんで食べて下さい」と、大きな包みと沢山のタバコを窓から入れ、万歳の声に送られて列車は走っていききました。

それから一月位して二通のハガキが来ました。父と私宛に、場所は〇〇〇〇です。

父には「任地に着いて元気でいるから安心される様に、父上も母上も体気をつけてお過ごし下さい」とありました。私には「やっと着いたよ、着いた所に弟が居て世間は広い様でせまいものだね。元気だから安心する様に、これから先は山内家がお前の双肩に掛かっているのだから頼むよ。どんな小さな事でも便りをくれ、又書くから」とありました。それきりで音信なく、三人姉妹と子供をだいたいの写真も届かなかった事でしょう。

出征軍人家族の招待を受けて大阪の歌舞伎座で、川崎弘子の「人妻椿」の芝居を見に行った事がありました。

其の後のある夜、主人と夢で会いました。

幕が上がると舞台には赤い十字をつけた白衣の勇士が三人、さて何が始まるかと思ってみていますと、あぐらの三人の前には洋皿に大きなおはぎが三個づつのおはぎが居ました。よく見ると真ん中に坐っているのは主人です。何の便りもなく何時帰って来たのか、私は子供に「お父ちゃんも居るよ、ほらあそこ」と指を差しました。三人はおい

しそうに食べ始めました。大きいので残すだろうと思つたのに、二個目が終わる頃小声で、正隆が居るのよ、一個は残してと願つているけど、舞台の三人は全部食べ終わりました。

目を覚ますと、一月六日の朝でした。主人は其の三日後に戦死したのです。

あの遠い南洋のマロエラップ島で、ひもじい思いをして。戦死の知らせを聞いたのは、引き上げて故郷に帰る二十三年三月の汽車の中でした。

やがて戦争も終わり、幸せなことに私の弟は戦地から不自由ながらも帰ることが出来ました。

弟は主人の言い残したことづけや形見の品、又自分のお金を減してまで、主人のお金を大事に持つて来てくれました。

色々な話も聞き、安心して現地慰霊に二回も行く事が出来て、弟に感謝して居ります。来年正月九日の命日が丁度五十回忌になりますので、法事を行いたいと思います。五十年の間には色々な事がありました。主人の見た事もない孫やひまごも居て、年忌には皆帰つて来ます。

正隆が小学校に入学する時、父が建ててくれた広い家に今は一人暮らしになりました。子供が退職して帰つて来る迄、元気で過ごしたいと思つて居ります。

来年三月の上京を楽しみにしてペンをおきます。(平成五・十二・十五)

五十年祭に寄せて

ラスベガス 徳原

徳子 勇

玉碎五十周年の記念行事、成功のうちには済まされたことと思ひます。そしてこの稿が発行される頃には現地慰霊巡拝もとどこおりなく終り、遺族会の一そうの親睦が成つたものとお慶び申し上げます。

しかし五十年祭を「お目出とう」と言つて喜んでいいのか躊躇していません。戦争さえなければ遺族会も五十年も存在しなかつたのですから。

激しい血みどろの戦いで多くの方々も亡くなられて半世紀が過ぎてしまつたとは夢のような気がします。

時が流れ、豊かさに恵まれ、皆が幸福になつたように見えますが、遺族の悲しみはこの五十年間うすれることもなく、夢のようというにはあまりにも生々しく、まだ長く長く悲しみは残ることとお察し申し上げます。

戦争は常に避け得られるものであり、それを避けられなかつたのは、その時代その国々のリーダーたちの愚かさによるものと私は信じています。そして国家を守る為という純粋な信念から、勇敢に戦い尊い命を散らした多くの戦士たちの栄誉は、永遠に賞賛されるべきものと思ひます。

私共はすでに米本土に移り、日本や

マーシャル群島から一そう遠くなつてしまいました。もうクエゼリンを訪れる機会もないと思ひますが、二十数年前、大ぜいの方々力が合せて建立した慰霊碑と、その周辺の情景がまだはつきりと目に残っています。

浮田様や佐竹様と、重油の匂いの小さな貨物船で、南の島々を慰霊して廻つたこともなつかしい思い出です。浮田様や建立を手伝つて下さつた方々の多くが他界されたことで、時代の移り変りをしみじみと感じています。

微力ながら遺族会のお手伝いをしたことで、多くの会員の皆様と知り合う機会に恵まれ、多くを学び、楽しんだことは私共にとつて何よりの収穫であり、失う事のない貴重な財産となりました。遺族会のメンバーが二世、三世と交代しながら発展されることを祈ると共に、新たな遺族会が結成される必要のない平和な時代の続くことを心から祈っています。

(一九九四年三月十五日)

弟を偲ぶ

新潟県 新保 晃

ブラウン環礁で戦死した弟 新保稔は、私共三人兄弟の真中で大正十一年生まれで私と一つちがいである。

弟は昭和十八年二月一日現役歩兵として新潟県村松町歩兵第一五八連隊(通称東部第六八部隊)に入隊し、三

月十三日満州へ向け出発した。その前の十二日私共家族は面会に赴いたが、これが最後の別れとなつた。当時私共は戦況不利であつても帰つてくるのは当たり前、何れは元気な顔を見せるものと思ひ、まさか南方それもはるかなマーシャルへ出て玉碎など夢にも想像しなかつた。

戦死公報は昭和二十一年一月(内報は二十年四月)受領、「南洋群島ブラウン島において昭和十九年二月二十四日戦死、陸軍兵長」であつた。私共は先ずこの島はどこにあり、どんな状況であつたかなど皆目分からず、私と末弟の二人で調べまわつた。四十年代になつてから情報の入手が多くなり、戦史叢書の購入、当遺族会への入会、兵籍簿の入手などもこの頃である。現在国内資料は殆ど目を通したと考えている。然し詳細は依然として分からず、戦死叢書にもとづき弟の中隊はメリレン島中央部で戦死と推定している。

兵籍簿によると、弟の村松入隊は「独立守備歩兵第十六大隊(白城子)第三中隊要員」としてであり、同時村松入隊者には第十一大隊(昴々溪)、第十五大隊(札蘭屯)要員もあつたことが、遺族の方々との連絡で分かつた。次いで弟は十一月「海上機動第一旅団機動第三大隊第三中隊(即ち第九中隊)に編入され、満州発トラック島經由一月四日ブラウン島に到着、以下未記載」で終わっている。

私共は昭和二十年八月一日夜B29の長岡空襲により丸焼けとなり、弟の遺品も殆ど焼失したが、幸い軍隊からの手紙類は助かった。これによると、「平斉線白城子満州第八〇五部隊河内隊気付」、また最後の便りは十二月二十四日付で「ウ五〇駆第三二三三部隊河内隊気付」となっている。

手紙には、満州では訓練が激しいうえに夏は酷暑、冬は極寒とあったが、初年兵でもありその苦勞は並大でいではなかつたであろうことは、容易に推測される。次いで一転して南方へ転出となつた。その時の心境を思うと何とも言えぬ気持になる。最後のハガキの末尾に「其の内に面白い便りします。では亦」とあった。最初は何気なく読みすこし戦後再読して、これは戦死の覚悟をそれとなく伝えたものとさとり、つくづく迂闊であつたと悔やんだものである。

戦死のとき弟は二十一才半ば、誠に短い人生であつた。まだこれからという年代であり、入隊の前に私にいろいろと将来の抱負を語つたが、全く無駄となつてしまつた。入隊前仲間同志の送別会で、会社同僚（何れ兵役につくであろう年輩の人達であつたが）の歌で藤山一郎の「青い背広で」の合唱は、今でも記憶に強く、当時の若者の気持ちを現わす青春の歌であつて、これを聞く度に弟の思い出につながってくる。来年は戦後五十年、弟の寿命の二倍

以上の年月が過ぎた。短かい人生であつたからこそ記憶は強く残り、思い出は深い。戦後二回訪島巡拝したが弟を含む玉砕の方々の遺品の入手は残念ながら期待出来ないようである。戦死の場所なども見極めることも出来ない。弟よ、安らかに眠れと祈るのみである。

父の思い出

香川県 石川 正興

昭和十八年の秋マーシャル基地に赴任する父を母姉と私の三人で呉から糸崎駅迄同行し見送つてから早や五十年の年月が経ちました。当時呉海軍工廠総務部長として内地勤務であつた父は戦局熾烈な中、軍人の本懐である第一線でのご奉公を念願してただけに出発前夜の家族だけのささやかな会食の中でも勇躍征途につくと云う満足感が感ぜられました。

当時兄正清は海兵七十期卒の海軍大尉として駆逐艦曙に乗艦中でしたが父は親子揃つてお国にご奉公出来る事にはのかな誇りと喜びを持っていました。私は当時中学三年生でしたがその後海兵七十七期として僅か四ヶ月間でしたが軍人への道を進みました。兄はその後マニラ湾にて敵機と交戦中左脚に重傷を負い横須賀海軍病院で左脚切断の手術を受けました。戦地の父からは数度手紙が来ましたがお正月を迎える

前線基地での餅搗きの様子や家族への思いやりの言葉など今もはっきり覚えています。

父戦死の報は十九年二月呉の留守宅にもたらされました。戦局は劣勢でしたが未だ内地への空襲はなく又皇族として始めて音羽侯爵が同島にて戦死された事もあり新聞で大きく報道されました。当時全国各地より有難い激励のお言葉を頂き母も感激していたのが昨日の様に思えます。

終戦後の苦勞は皆同じですがもともと病弱であつた母は軍人恩給復活の朗報も知らないまま昭和二十五年五十五才で亡くなりました。終戦を境に手のひらを返した様な世論の風潮の中、精神的に辛いまま世を去つたのが今でも不憫に思います。

兄は片脚切断と言う大きいハンデのなか戦後の生活苦と戦い乍らマーシャル方面遺族会のお手伝いをさせて頂き、現地にも数度参拝し父の霊を慰めました。又乗艦していた駆逐艦帆風、曙の遺族会のお世話など戦死者の慰霊に自分の使命感と生き甲斐をかけていました。昭和六十年十二月に病没しました。靖國神社での慰霊祭には皆勤していましたが今回の五十年祭には天国から参加する事になります。姉利子は土田家に嫁し戦後苦勞しましたが四人の子供を育て今は熊本で幸せに暮らしています。

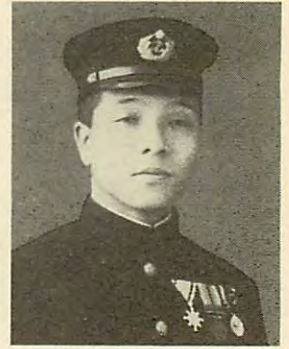
と薄れ戦前戦中派の世代も除々に少なくなり、又「侵略戦争」発言も出ている中、私達遺族は現在の繁栄した日本を尊い命に代えて守つてくれた父兄弟夫達の偉業を、この機会に正しく子供達と後世に引き継ぐ責任を痛感します。最後になりましたが戦後の大混乱期の中マーシャル方面遺族会を、手弁当で献身的に生み出し育て発展させて下さつた、数多くの有志の方々に心から厚くお礼を申し上げます。又亡くなられた方々にもこの機会に更めてご冥福をお祈りし感謝の気持ちを捧げます。

玉砕五十周年を迎えて

(秋山門造命次男)

福井県 田賀 朋子

振り返れば長かつた日々、そしてあつという間の五十年。色々の想いが走馬燈のように思い出されて来ます。主人との最後の別れは千葉県の館山でした。長女が三歳、長男は八ヶ月でした。海軍軍人なのでお見送りは何回もしてましたので「元気に帰つて来たよ」との知らせがもらえるものと、何時もの別れのパターンと信じて笑顔で福井へ帰つて来ました。その後戦争は激しくなり私の心に何か一抹の不安がつり、今度はもしかして……と毎日主人の無事を祈つておりました。その折のある夜、それは夢とも幻ともつかぬ姿がスーッと立ち



「アッ」と思う間もなく消え、そんな夜が三夜続きました。それから間もなく役場より「二月六日ルオット島にて戦死」の公報を受けました。

やっぱり逸早く私や子供の許に来て下さったんだと思い、涙すら出ませんでした。五十年たったいまでも私の心にはあの時の姿がハッキリと残っていて忘れる事が出来ません。その後空襲も鯖江市は難を免れ、私は子供と共に両親等に見守られ物資の少ない中にも穏やかに暮らして来ました。

五十年過ぎた今日、私の生き甲斐である二人の子供はそれぞれ家庭をもち幸福に暮らしております。この事が今の私にとりまして唯一の幸せでございます。又、マーシャル方面遺族会の皆様のお蔭で、マーシャル諸島に三回も行き、ルオット島にも二回、その内の一回は子供二人も同行して、「お別れした時にはあんなに小さかったのに……」と成長した二人の子供を見て戴きました。

南洋の島は穏やかで、住民はのんびりと暮らしております。エメラルドグ

リーンの海に囲まれたあの美しい島で、あの様な激しい戦争があったとは思えない程です。白いサクに囲まれた墓地はきれいに手入れされていて、赤い鳥居が立ち、島で戦死なされた方々の御遺骨がまつられてある由、米軍の御厚意に心から感謝致しております。

あの日からもう五十年。世界中のどこかで毎日戦争しています。飢えて死んでゆく人も沢山います。私共の日本は世界中で一番平和の恩恵をうけておりますが、これはあの戦争で犠牲になった英霊のおかげと信じています。

追悼に心あらたに亡夫偲ぶ
戦没者五十回忌の彼岸花

亡き兄の五十回忌に際して

長崎県 大石 明

私と亡兄は十四歳も離れ、兄は長男、私は末弟で、私の幼いころは散歩や町に出かけるときはおんぶされて可愛いがられ、私は六十二歳になった今でも脳裏に焼き付いております。

その兄が出征するときの写真を見つめる時、私はまだエプロンをかけており、兄が父のようにも見うけられました。大東亜戦争が勃発したとき、兄は戦艦霧島に機関兵曹として軍務についており、母に連れられて面会に行つた話を混じえながら憶えていることを綴つ

てみます。

戦争も日本軍の南洋群島進攻で湧き返っている時、兄は兵役が一応切れ、その際志願して継続して軍務につき、戦争も中期の頃戦況不利（大本営発表では有利）となつて、いよいよ戦地に赴くことになり、その別れの面会には父が行こうかと兄に相談したところ、いや母と会いたいと言つて父を落胆させくやしがらせておりました。それで母と私が、兄に面会の為に（私は学校を早引きさせられた。急だったのせう。）佐世保軍港にいそいで行きました。私はその時、兄との最後の別れとは知らず商店街では子供心に玩具をねだつたりしました。別れ橋という橋の所で三人で写真を撮りました。その後、兄は戦地に赴き便りがきておりました

が、所在不明、ただウ九〇ウ五〇の暗号発信地しか解つておりませんでした。昭和十九年のある日父は会社に出たけれど、何か胸騒ぎがして気分が悪くなり、早退して帰宅していたのですが、その日に兄が南洋群島に於いて戦死したとの報せを受け、両親が仏壇の前で号泣していたのを思い出します。

後日、軍から遺骨が引き渡され、長崎駅から伊勢町の自宅まで父が遺骨箱を胸に抱き、家族全員で歩いて帰ってきました。法要を済ませお墓に納骨する際に箱の中を見ますと、木札が一ヶ入っているのみでした。

今平和な世の中になつているのも、

亡き兄たちの尊い犠牲の上にあり、当

時の戦時の情況を見る時、米軍のあの物量にもを言わせた砲撃のすさまじさを思うとき、又亡き兄達があのような戦闘をしたのかと思うと……。現地に於いて丁重なる弔いをしなれば兄が本当にかばれません。

このたび、両親も彼岸の彼方へ旅立ち、私が亡き両親の役目をしなければと思ひ、何か活動機関がないかと厚生省にお尋ねしたところ、遺族会があり、又来年は五十年祭があることを知り、亡き兄の現地での慰霊祭に是非参加させていただこうと思つております。（平成五年十一月記）

南への憧れ

福島県 江間 正二郎

新潟の両親、東京の大学時代の下宿のおばさん、横浜の姉、北から南へ挨拶をすませ、横浜駅頭の横須賀線二等車に乗り込んだ兄信太郎を見送つたのは私ひとり。「あとをたのむよ。」誠に淡々たる旅立ちであった。空路にてクエゼリン環礁へ赴任の由。飛び石で北上中の次の攻撃目標として絶対絶命の基地となろうとは。昭和十八年（一九四三年）十一月のこと。

東條首相による大学半年繰り上げ卒業、高雄（台湾）第二期予備学生、久里浜通信学校電探士訓練を修了。「寒い所は真つ平御免。暖い南へ。」の念

願かなつての赴任先であつた。「髪の毛を伸ばした。上官の方々はとても親切で嬉しい。新米少尉のくせに長髪なんて生意氣だと冗談まじりに叱られたが、至急調髪用の鋏を送ってくれ。」これが最初で最後の手紙。早速父が送つた燕産の鋏は果して現地に到着したやら？

大正七年（一九一八年）金沢生まれの兄は幼稚園、松ヶ枝小、金澤一中、龍山中（京城）、立教中（東京）府立五中補修科、旧制新潟高、東大文学部国史学科、海軍予備学生、海軍通信学校、と二十六才の全生涯を当時としては恵まれた園児生徒学生生活で過ごした。勉強は大層苦手で、おかげさまで長くかかったが、短身で足早く豆短駆の愛称で野球や短距離走にあけくれたネアカの人生であつた。特に幼少より父の深い愛情のもとに育つた。（訃報到着後の父の落胆衰弱は私をビツクリさせた。）

父は奥州三春藩士族、母は会津藩猪苗代士族の出。伝承によれば、祖先は蝦夷民族。北海道から南下、津軽經由秋田雄物川上流に移住。阿部貞任の配下として江畑三郎貞政と称した土豪。戦国末三春藩秋田侯に隨いて三春町に定住の由。衣川の館阿部貞任の時代、戦国織豊時代、明治維新戊辰之役、第二次世界対戦等は歴史の大転換期である一方社会交流の拡大期でもある。大和民族、大陸民族、欧米民族との接触

融合の度を濃くすると共にその軋みに礎石となつた人々も多かつたことは想像に難くない。

寒い北国の先住民族が如何なる犠牲を払つても、明るく暖い太陽の恩恵のもと、平和に暮らしたい夢があつたことは否定できない。暖い南の島へ旅立つたのが昨日の様に思われる兄の血の中にも、この夢が流れていたに違いない。南への憧れは平和に通ずる道でもある。平和は生きとし生ける人々が辛酸をなめ、多くの人が礎石となつて初めて獲得できるものの様に思う。今の日本の平和が更に世界の平和に繋がることを願つて鎮魂の祈りいたします。

遅れ馳せの五十回忌法要

岡山県 薬師寺 理助

「この三月末は兄の五十回忌。お寺さんや親族をお招きして、わが家で法要を営もう。」

昭和十九年三月マロエラップで戦死した兄立男の法要をどのようにいつするか、ちょうど一年前の正月の案内との相談話である。

お寺さんとの日程をつめて親族へ声をかけようとしていた矢先の一月下旬に、私がかぜをこじらせて余儀なく入院。その入院中に、家内の妹がクモ膜下出血で倒れて一週間後に急逝。その頃から危篤に陥つては持ち直しを繰り返していた姉の主人が遂に六月不帰の

客。その前後暫くの間は姉が長い看病疲れで入院の繰り返し。そのうち家内が膝を患つて病院通い。

そんなこんなで兄の法要は変更を重ねずる延期。そして年の暮近くには家内の弟が肝疾患で入院。

少々オーバーでキザッポイ言い方になるが、わが家の周辺は近年になく「暗い波濤」の断続した二年であつた。

話は十年近く前のことになるが、久々にお会いした私とも夫婦の媒酌人が「君の兄さんは海軍予備学生の兵科二期だったね。阿川弘之が『暗い波濤』を出したが、兵科二期物語だ」と一読を薦めてくださった。媒酌人は九死に一生を得た飛行予備学生だっただけにこの著作の感銘が大きかつた由。

上下全二十七章に及ぶ長編であつたが、一気呵成に読了。それは若き海軍士官のひたむきな、しかし時として苦悩と、とまどいの織りなすものもあるなかで明け暮れた訓練と、やがては過酷な戦場を転戦して、ある者は南海に散りある者は敗れた故国の土を空しく踏んだ兵科二期予備学生にまつわる一大ドキュメントである。

この長編は、単なる戦記物でも反戦小説でもなからう。もっとも私にはそんなことはどうでもよい。著者自身が兵科二期生だったと知り、この長編は著者自らと同期五百五十余名の帰らぬ青春への鎮魂歌にはかならないものと受けとめ、兄の位牌にお酒をお供えし、

この上下二編もお供えして、おさがりで晩酌をした。

平成六年は兄が戦死してから五十年この春には遅れ馳せの五十回忌法要を営むことしよう。天に眠る兄と父母たちにちよつぱり言い訳とお詫びを述べて。

特設捕獲網艇「宇治丸」を

御存知の方へ

父篠崎松雄（栃木県出身、兵曹長、昭和十九年二月六日クエゼリンで戦死）の乗っていた宇治丸を御存知の方がおられましたら御連絡下さい。

〒229 相模原市横山二一九一
○四二七―五四一―一九三八

石澤 洋子

謹んで 朝香孚彦様の

御昇天を御悼み申しあげます

本会元相談役朝香孚彦様は、去る五月五日午前十一時三十二分、急性腎不全のため御昇天されました。

御年八十一歳と承りました。

朝香様は、五十年前にクエゼリン島で玉碎された音羽正彦命の御令兄で、本会元名誉会長朝香宮嶋彦王の御長男であります。本会創立以来相談役として、本会の運営、活動などについて懇切な御指導を賜りました。謹んで御冥福をお祈り申しあげます。

ウオツゼ、マロエラップ座談会

■日時/平成六年四月十七日
■場所/東京都勤労福祉会館

ウオツゼで双子の兄を亡くした昼間常任監事が進行役をつとめて話し合いました。

全員自己紹介のあと、ウオツゼで五五二航空隊整備長として昭和十七年四月から二十年十一月まで苦労を共にしていた土屋太郎さん(篤志会員)から当時の島の状況を説明された。島を見たことのない者も、折々の「環礁」に紹介された記事を思い浮べ隊員の労苦を偲びました。(末尾参照)
参加者各々が亡き肉親との係わりや心に残る思いで話し合い、五十年の歳月をさかのぼって感慨を新たにしました。

ウオツゼに慰霊碑建立を提唱している人のいることについて、いくつかの意見がありました。折角建てても訪れる人がなくなるのは時間の問題で島の人々に迷惑をかけるだけ。日本軍の残した残骸を取り除くとか、教育や民生に役立つ費用を寄贈する方がよいのでは」との意見が大多数でした。

- (参加者) 栗原 利雄 小林 法子
菅谷喜代子 西田 恒子 昼間 楽平
柳沢 正雄 吉田 操 中村 久
土屋 太郎 佐藤会長ほか役員
(「環礁」に見られる関連記事抜粋)
3号4頁 4号7頁 8号3頁 9号4頁
9号12頁 31号9頁 46号2頁 53号4頁
53号6頁 54号8頁 55号5頁



名簿訂正

(6) ◎平成3年8月15日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

Table with columns for name, address, and details. Includes entries for 小笠原 広, 楠 宗親, 北原 ひで子, 金崎 史, 腰川 妙子, 高木 庄一郎, 井口 ケイ子, 井口 慶之助, 清水 武, 西田 恒子, 石澤 洋子, 大島 義治, 萩原 誠, 藤木 ハナ, 柚 栄.

- 56 丸 田 忠 雄 〒606 京都市左京区岩倉三宅町419 TEL075-781-8001 戦歿者丸田富一 続柄三男 所属部隊海軍軍属 戦歿年月日 19.2.6 戦歿地クエゼリン<新入会>
- 57 林 田 峯 子 〒537 大阪市東成区東中本1-10-16 TEL06-981-4100 戦歿者高木文三 続柄妹 所属部隊65警 戦歿年月日 19.2.6 戦歿地クエゼリン<新入会>
- 61 浦 手 ハ ル 〒739-17 広島市安佐北区落合3-1-10 TEL082-845-3452に変更
- 61 瀬 戸 隆 子 〒729-42 広島県双三郡吉舎町大字三玉389-2 TEL082-443-2355 戦歿者児玉診三 続柄長女 所属部隊第4艦隊司令部 戦歿年月日 19.2.6 戦歿地クエゼリン<新入会>
- 63 秋 山 百合子 観音寺市観音寺町甲3082に住居表示変更
- 64 新 田 忠 雄 〒791-02 松山市平井町2675 TEL0899-75-0497 戦歿者新田徳一 続柄弟 所属部隊不明 戦歿年月日 19.2.6 戦歿地エビゼ<新入会>
- 65 山 本 峯 子 山本峰子に訂正
- 67 川 原 勲 〒803 北九州市小倉北区新高田1-13-8 TEL093-592-2374 戦歿者川原富造 続柄長男 所属部隊不明 戦歿年月日 19.11.13 戦歿地ヤルト<新入会>
- 67 西 原 康 雄 〒811-34 福岡県宗像郡福岡町3701-1 TEL0940-42-1221に変更
- 68 家 迫 ソ ヲ 死亡のため家迫政雄が継承
- 72 石 塚 文 子 〒816 福岡県春日市大字下白水397-14 TEL092-572-4758に変更
- 75 久 高 友 三 〒902 那覇市字古島199-1 TEL098-885-3266 戦歿者久高友徳 続柄弟 所属部隊不明 戦歿年月日 19.2.24 戦歿地ブラウン<新入会>
- 76 石 元 利 親 〒781-11 土佐市高岡町乙1774-2 TEL0888-52-1657 備考クエゼリン6根司<新入会>
- 76 薄 木 智 雄 〒651-11 神戸市北区北五葉1-11-30 TEL078-591-3655 備考エビゼ952空<新入会>
- 77 久 保 末 喜 〒551 大阪市大正区鶴町2-2-11 TEL06-551-2567 備考エビゼ952空<新入会>
- 77 黒 崎 貫 三 郎 〒221 横浜市神奈川区桐畑10-5-301 TEL045-321-2901 備考エビゼ952空<新入会>
- 77 武 智 秀 一 〒791-02 松山市平井町2619 TEL0899-75-0461 備考エビゼ952空<新入会>
- 78 兵 頭 義 彦 〒796-02 愛媛県西宇和郡保内町磯崎 TEL08943-5-0050 備考クエゼリン6根司 <新入会>
- 78 峰 岸 栄 一 〒345 埼玉県南埼玉郡宮代町宮東394 TEL0480-32-4592 備考ルオット、クッゼリン野重7連隊<新入会>

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|------|-----|----|----|----|-----|----|---|---|-----|---|-----|-----|----|----|---|---|---|---|--|
| 浄永 | 岩佐 | 千葉 | 山下 | 中根 | 櫻井 | 北原 | 埼玉 | 群馬 | 田名 | 栃 | 富田 | 茨城 | 楠 | 福 | 山 | 近藤 | 秋 | 山 | 高橋 | 宮 | 岩 | 塚 | 青 | 田 | 北 | |
| 孝 | とみ | 県 | みつ | 杉子 | かね | ひで子 | 馬 | 武夫 | 綱夫 | 木 | 保 | 親 | 宗親 | 島 | 形 | キクエ | 田 | 本 | とし子 | 城 | 手 | 原 | 森 | 村 | 海 | |
| 津久井 | 加瀬 | 相川 | 野田 | 柴田 | 栗原 | 宇田 | 珍田 | 吉川 | 猪瀬 | 堀江 | 大熊 | 鈴木 | 江 | 丹 | 佐 | 奥 | 山 | ちゑ | 平形 | 伊勢 | 小杉 | 菅 | 菅 | 沼 | 岩 | |
| 艶子 | よし | 孝夫 | 雅子 | 貞子 | タネ | 川ひさ | 光 | 芳蔵 | ナカ | 誠一 | もと | ヨシエ | 正 | 野 | 藤 | 山 | キ | いせこ | 照男 | 照男 | サヨ | 廣 | 田 | 山 | 川 | |
| 豊谷 | 倉田 | 石川 | 藤田 | 千田 | 近藤 | 小野 | 日向 | 木村 | 若狭 | 三浦 | 三浦 | 吉 | 津 | 松 | 松 | 熊 | 熊 | 孝 | 相 | 馬 | 菅 | 正 | 中 | 田 | 荒 | |
| 美恵子 | 茂弘 | きみ | 清瀬 | 恒子 | マスエ | リエ | 野 | 恒三郎 | 明光 | 和枝 | 和枝 | ミドリ | 孝 | 木 | サ | 谷 | 谷 | 子 | 馬 | 馬 | 原 | 治 | 田 | 山 | 澤 | |
| 萩原 | 露木 | 栗田 | 金子 | 岩田 | 神奈 | 山 | 安 | 間 | 浜 | 西 | 中 | 菅 | 鈴 | 齊 | 小 | 黒 | 大 | 大 | 岩 | 井 | 飯 | 東 | 米 | 谷 | 芳 | |
| 誠 | 千鶴 | 千代子 | 武晴 | とし子 | 奈川 | 森 | 井 | 々 | 田 | 田 | 村 | 村 | 木 | 藤 | 山 | 川 | 島 | 島 | 浪 | 上 | 島 | 京 | 田 | 沢 | 賀 | |
| 松 | 長塚 | 穂谷 | 川 | 大石 | 赤坂 | 柳 | 水 | 番 | 沼 | 中 | 高 | 菅 | 松 | 藤 | 藤 | 池 | 木 | 大 | 内 | 石 | 五 | 都 | 田 | 沢 | タ | |
| 綾 | 隆夫 | 友孝 | 茂子 | 純一 | スズ | 正 | は | 信 | 正 | 順 | 高 | 菅 | 幸 | 幸 | 竹 | 小 | 木 | 内 | 海 | 谷 | 十 | 都 | 田 | 沢 | ツ | |
| 三村 | 西森 | 鈴木 | 熊沢 | 沖立 | 伊 | 山 | 望 | 日 | 長 | 西 | 谷 | 昇 | 江 | 江 | 佐 | 島 | 栗 | 静 | 石 | 橋 | 嵐 | 都 | 山 | 英 | ツ | |
| ともよ | サツキ | リン | 静子 | キヨ | ヤス | 妙子 | 月とよ子 | 間 | 谷川 | 沢 | 初 | 清 | 清 | 宗 | 宗 | 重 | 原 | 枝 | 橋 | 石 | 孝 | 都 | 山 | 英 | ツ | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため
 浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。
 今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

寄 付 者 芳 名

(敬称略・順不同)

吉田 正次	吉田 操	和歌山県	福井 栄子
新 潟 繁男	片桐 サキ	鳥 取 県	杉川 及江
坂井 繁男	佐藤 フジ	島 根 県	園山 和子
新保 たか	高野 清	岡 山 県	金子ミサヲ
高林 セキ	藤田 ヨリ	広 島 県	植田 敏裕
米田 トシ	山田 正三	奥井 礼子	小林アヤ子
富 山 昭二	池田 淑子	溝口ハナコ	小松本タカミ
棚橋 光栄	中林 ちよ	山 口 県	広田 通男
村 梶 室田 薫	佐々木久子	香 川 県	秋山 武
石 川 久子	中山 いよ	多 田 マス	富田トシ子
高 島 芙蓉	黒川 正文	愛 媛 県	井原トノヨ
福 井 春枝	田賀 将一	泉田 君子	久保田泰子
鳥 梨 黒川 中山	三井 精義	宅見 運保	松友 都
長 野 光子	牛山 光子	森田 静子	山本 峰子
高見沢およう	宮下 礼子	長岡 俊夫	田中 百合
岐 阜 鳥本 和子	堀尾 藤吉	高 知 県	田中 百合
山 田 八重	吉田 綾	馬 場 常	田中 百合
静 岡 飯田 たつ子	渡辺 三三	福 岡 県	青山アヤ子
大塚 かね	後藤 行雄	荻野千代子	金子庄之助
野崎 豊秋	服部くにゑ	小林 繁幹	下釜 春江
愛 知 岡島 みね子	山田 登世	橋本マサエ	秦 サカエ
川 越 コウ	山田 あき	吉松 貞子	田中 ノエ
三 重 近沢 あき	吉田ひさ子	山 田 雪子	草場 マキ
滋 賀 正野 きぬ	中川 修	長 崎 県	板浦 重雄
京 都 川本 彦次	八木 きよ	前田 フサ	森 テル子
丸 田 忠雄	増枝 八木	熊 本 県	植川 二男
谷 正文	馬場富美子	片山 玲子	北村 権蔵
大 阪 中野フヂエ	山形 雅俊	村上佳寿子	塚野ヨシ子
福 田 音和	剛郎	大 分 県	木村二三夫
兵 庫 枝光	山形 雅俊	宮 崎 県	池田 トミ
山 野 イクエ	道明	森 フサエ	山内 キク
		鹿 児 島 県	川畑ツルエ

浜崎 武一 原田 惟行 村上 ノキ
山田フヂエ
沖 縄 県 石原 キク 宮城カマド
宮城 幸子 久高 友三
篤志会員・会友等 大給 湛子
秋元 輝夫 江村 源次 押谷 義雄
恩田 寛次 香月 正紀 川副 克己
吉良 正義 キリバス共和国名誉領事
室 久保 末喜 佐藤 敬義
篠崎 英夫 高田源次郎 豊谷 秀光
鳥丸 栄二 兵頭 義彦 土屋 太郎
松平 永芳 渡辺 哲夫 井上 義夫
以上は平成五年十二月一日から六年
五月三十一日までに、寄付された方々
二九五名で、その合計金額は百五十九
万四千円でした。

環礁六十号八頁第二段中の「盤谷丸
沈没の年月日、十九年五月二十日」は
「十八年五月二十日」の誤りでした。
謹んで訂正いたします。

本部だより

靖國神社奉賛會に御入会を

たことでした。
五十年祭は済みましたが、神霊と私
どもの係わりは絶えることはありません
ん。相ともに慰霊の誠を捧げ、子々孫々
に伝えましょう。

☆自然現象による会員の減少は、神霊
のお嘆きであります。マーシャル、ギ
ルバート諸島方面の戦没者の親族は誰
でも御入会頂けます。戦友の皆様には
会友として御入会頂いております。会
員、会友とも年会費二千円です。お知
り合いに該当者が居られましたら入会
をお勧め下さい。

☆環礁「合併本の価格を、一集から
六集まで各々一部送料共一五〇〇円と
改訂しました。

☆「五十年を顧みて」に御寄稿をお願
いしたところ、予想を超える多くの応
募を頂きありがとうございます。
紙数を五割増しにしましたがそれでも
のせきれない分は次号に掲載いたしま
すので、御了承下さい。新たにお出
下さる方は九月末までに到着するよ
うおねがいたします。要領は、六十
号十六頁を御覧下さい。

本 部
〒103 東京都中央区日本橋人形町
一八一二(泉商事ビル)

マーシャル方面遺族会
電話〇三三三六六一八七六〇
FAX〇三三三六六一六二四一